



#### 武蔵野大学 学術機関リポジトリ

Musashino University Academic Institutional Repository

資料 折口信夫・國學院大學講義 発生日本文学史 昭和三年(下)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2019-04-24
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 伊藤, 高雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/966

# 発生日本文学史 昭和三年 (下)

# 伊藤 高雄編

#### 八月何

後、伊藤が整理した。学中の藤本千織と院友の小野智恵美が加わって読合せをした翻刻に際しては、伊藤と、國學院大學大学院博士課程前期在

た事がある。 の山のこちらであるからして、後世まで伊勢を以つて関東とし

て採集されたものらしい。この東歌の変化は平安朝の中頃にな朝には、宮廷詞庁が神楽歌を採集した様に、東の神事の歌としである。古今集になると、神事の意識が確かに出てゐる。平安古今集の東歌は万葉の東歌と少なくとも用途が多少違ふ。万葉古今集の東歌は万葉の東歌と少なくとも用途が多少違ふ。万葉

ると消えて了つて、新しく東遊が出て来る。

をうに、東遊に東歌が付いてゐた。ところが、歌の閑却されて なる。都では、あそびと称し、遂には音楽をあそびと云ふ に関連した楽器等をあそびと称し、遂には音楽をあそびと云ふ に関連した楽器等をあそびと称し、遂には音楽をあそびと云ふ に関連した楽器等をあそびと称し、遂には音楽をあそびと云ふ をうになる。都では、あそびを音楽を奏することの意味に用ゐ られたが、東遊と云ふのは東歌の舞の手であると思ふ。東流の られたが、東遊と云ふのは東歌の舞の手であると思ふ。東流の なる。都では、あそびと音楽を奏することの意味に用ゐ をうに、東遊に東歌が付いてゐた。ところが、歌の閑却されて

云ふやうになつた。舞を主とした時代に、東歌と云ふ事は忘れられて、東遊を専ら

いて東遊をするようになつた。
で寄進する風が地方にも拡つて、宮廷から奉らないでも社において、宮廷から奉らないでも社において、宮廷から本らないでも社において、この頃より東遊を祭り東遊譜の出来たのは一条帝の時であつたが、盛んになつたのは

にも祝福を分けたところにある。 は、神にも奉られる事となつた。かくなつた根本思想は、神位に居られた。天子が神とも人□が東人から受けると同様、神と、神にも奉られる事となつた。本来は、天子の方が神より上東から起つたたまふりの舞が、天子と神との関係が同格になる東から起つたたまふりの舞が、天子と神との関係が同格になる

るが、その一部分のみを代へるのであつて、個性のない歌となるが、その一部分のみを代へるのであつて、個性のない歌となきし上げた魂は、天子から更に近親に分ち与へられたのである。差し上げた魂は、天子から更に近親に分ち与へられたのである。一度を奉るのは、自分の魂を天子に差し上げるしるしである。一度なると、代へ唱歌が行はれるやうになつた。春日、石清水、住なると、代へ唱歌が行はれるやうになつた。春日、石清水、住なると、代へ唱歌が行はれるやうになった。春日、石清水、住なると、代へ唱歌が行はれてゐる。即ち歌の他の部分は同じである。本るが、その一部分のみを代へるのであつて、個性のない歌となるが、その一部分のみを代へるのであつて、個性のない歌となるが、その一部分のみを代へるのであつて、個性のない歌となるが、その一部分のみを代へるのであつて、個性のない歌となるが、その一部分のみを代へるのであつて、個性のない歌となるが、その一部分のみを代へるのであつて、個性のない歌となるが、その一部分のみを代へるのであつて、個性のない歌となるが、その中である。

……なをかけやまのかづの木やを々々々(東遊の二歌

ればならない。証拠はないけれども

つて了つた。で、この東歌は疑ひもなく相模の国のものでなけ

かずとも(巻十四の三四三二)足柄のわをかけ山のかづの木の、わをかづさねも。かづさ

るものがあるけれど、風俗歌譜の風俗は東遊と同じもので、駿歌の風俗、悠記・主基の風俗と云つた様に多くの風俗と呼ばれいものでなく、平安朝頃の風俗(短歌形にあらず。更にくづれいものでなく、平安朝頃の風俗(短歌形にあらず。更にくづれいものでなく、平安朝頃の風俗(短歌形にあらず。更にくづれいものでなく、平安朝頃の風俗(短歌形にあらず。更にくづれてゐる。)色々ある。大嘗祭の風俗もある。風俗歌譜、国曲のてゐる。)色々ある。大嘗祭の風俗もある。風俗歌譜、国曲のでゐる。この歌を東の舞では、固定的に最初に使つてゐた。そとある。この歌を東の舞では、固定的に最初に使つてゐた。そとある。この歌を東の舞では、固定的に最初に使つてゐた。そ

歌より出たものであるらしい。八乙女が降りて来た趣が駿河歌の歌を単に風俗と呼ぶに至つたのである。風俗の方は自由であったが、東遊の起源の伝説が入つてゐる。風俗の方は自由であた時の歌が出てゐる。東遊の伝来は、天から仙人が降つて舞をた時の歌が出てゐる。東遊の伝来は、天から仙人が降つて舞を海のを、千守の翁が、砂中に穴を掘つて身を隠して、その舞と流のを、千守の翁が、砂中に穴を掘つて身を隠して、その舞と流のを、千守の翁が、砂中に穴を掘つて身を隠して、その舞をから出て東全般に汎つてゐる。大体、東風俗の意味である。河から出て東全般に汎つてゐる。大体、東風俗の意味である。

固定し、歌を主としたものは風俗となつて分れて了つたのであもと東遊と風俗とは一つであつたのに、東遊は舞が主となつて

の中にある

らう。

二十のものは、この意味を拡げて個人として宮廷に召されて、ので、当時は東遊の名前はまだ見えてゐないが、大体東歌があので、当時は東遊の名前はまだ見えてゐないが、大体東歌があな。東人が宮廷に誓つた歌の台帳が、万葉集巻十四である。万年は、東遊はないが、東歌に舞が伴つてゐたものであらう。東歌は常に奉られた。そして服従を新たに誓はせられたのであまった。東近は東遊の名前はまだ見えてゐないが、大体東歌があので、当時は東遊の名前はまだ見えてゐないが、大体東歌がある。東人が宮廷に誓つた歌の名に記述して宮廷に召されて、

ことわざと云ふ

切れないから、この辺で打切つてことわざの話をして見やう。とわざの形のものがあるらしい。国曲の話は何処まで行つても短歌の前形がある。(長歌前)その中に歌の形でなくして、こそれで、ふりと云ふ歌の中で一番古い歌に上つて行つて見ると、

国曲の歌であつたのが、古今集の頃には一種の神事となり、

平

防人として九州へ行く東人の誓ひの言葉である。万葉の昔より

安朝の中頃には本当に神事の歌となつて了つた。その間に通じ

た信仰を考へる事が出来る。

霊より神に申上げるのが、よごとである。これ等、よごと、の神が精霊に云ふ詞が正確な意味の祝詞である。これに対して精つた。今年は稍く解つて来た。以下、述べて行かふ。

一体ことわざとは何であるか。私には昨年はまだよく解らなか

一のことを云つたのである。

「おり神に申上げるのが、よごとである。これ等、よごと、のりとの間に、エツセンスが出来て来る。その脱落したものが、りとの間に、エツセンスが出来て来る。その脱落したものが、場ごとである。これ等、よごと、の霊より神に申上げるのが、よごとである。これ等、よごと、の霊より神に申上げるのが、よごとである。

い人の与へる、信仰的の制裁訓諭のわざごと、神わざの言葉をのうたの中のうたに当るもの、古い形が、ことわざである。尊即ち後世の口説にあたるものがある。このうた、ふり、のりとよごとを全体云ふ代りに、その一部を云ふて自分の考へを云ふ、よごとを全体云ふ代りに、その一部を云ふて自分の考へを云ふ、

このことわざの部分を唱へれば、全体を云はなくとものりとのこのことわざの部分を唱へれば、全体を云つてもよごと、叙効果が出たのである。それは、うたのみを云つてもよごと、叙事詩の全体の効果が表れるのと同様である。ことわざの意味を新しくして行つたものが、教訓のことわざである。ことわざの意味を新しな表訓的である。これが正確な用法のあまつのりとのことわざは後事詩の全体の効果が表れるのと同様である。このことわざは後事詩の全体の効果が表れるのと同様である。ことわざの意味を新しないと云へば、天つ祝詞に属するところは文章から抜いて了つてかと云へば、天つ祝詞に属するところは文章から抜いて了つてあるのである。天つ祝詞云々とは、よごとの中に出てゐる。又なるのである。天つ祝詞云々とは、よごとの中に出てゐる。又なるのである。天つ祝詞云々とは、よごとの中に出てゐる。又なるのである。天つ祝詞云々とは、よごとの中に出てゐる。又なるのである。天つ祝詞云々とは、よごとの中に出てゐる。又なるのである。天つ祝詞云々とは、よごとの中に出てゐる。又なるのである。天つ祝詞云々とは、まごとの中に出てゐる。又なるのである。天つ祝詞云々とは、まごとのが、まだない。

寿詞

詔詞

鎮詞

ある。今までの説は皆誤りであつて、皆本当の天つ祝詞の部分大祓も正確には鎮詞に属するけれども斎部祝詞とは違ふもので中臣祓と称する大祓のことばの中にも天つのりとが出てゐる。神聖なる古い伝来のものと云ふ事である。

の詞が入るべきところでなくして、天つのりと云々の意味は、斎部ののりとに殊に天つのりと云々とあるが、これは天つ祝詞

詞である。 天つ祝詞の本当のものは、口頭伝承をされてゐるところの短い詞云々とした所だけをまじなひの詞として云ふてゐるのである。は抜いてゐるものであることは云つた学者もある。即ち天つ祝

とうかみをみためく

受売の命の詞とされてゐるものは、れてゐる。これを唱へると占がよく出ると云ふのである。又字と云ふのは、先づ天つのりとに当るものの一つであらうと云は

ひふみよいむなやこゝのたりとふ

と云ふ詞である。石上の鎮魂の詞、三種祝詞では、

ふるへくゆら、にふるへ

らで示してゐる。この三つのものを鈴木重胤も天つ祝詞と考へ身に魂をつけるのである。魂が身につく時の微妙な感覚をゆらと云ふてゐる。これは魂をつける時の詞である。これを唱へて、

てゐるやうである。

である。この詞を唱へると、強い力で精霊が人につくと云ふた詞の中にあつて天つのりとと云はれ、ことわざの元をなすもの祝詞から出たものゝ真言である。これから類推して見ると、祝これ等の詞は、正しく祝詞から出たと云へないかもしれぬが、

一種の鎮魂の詞が祝詞から分裂して来た。これが本当の天つ祝上に奉つた魂を、また下へつけてやるのである。つて上より下へ魂を与へる考へである。下から一度持つて来て鏡餅の話は魂の分割の考へを談つたものである。たまふりに当

紳士としてうたと共に覚えねばならなかつた。これ等、国々の

まふりの形を表してゐる。

あつても何のことか、何の役に立つたのか解らない。あつても何のことか、何の役に立つたのか解らない。中臣蔵中のものも、字受売の命のものも皆正確な天つ祝詞とは云へ石上のものも、字受売の命のものも皆正確な天つ祝詞とは云へにとわざとうたとが多く記載されてゐる。おどけ、滑稽と思ははるたを多く持つてゐた。この考へ方によつて記紀を見ると、はうたを多く持つてゐた。この考へ方によつて記紀を見ると、はうたを多く持つてゐた。この考へ方によつて記紀を見ると、ことわざとうたとが多く記載されてゐる。おどけ、滑稽と思はれるやうなことわざも載つてゐる。例へば、「堅石も酔ひ人をはうたを多く持つてゐた。これが「かれ、ところえぬ玉造りとぞ云ふ」とあるが如き、これ等が「かれ、ところえぬ玉造りとぞ云ふ」とあるが如き、これ等があつても何のことか、何の役に立つたのか解らない。

つたのであつて、それがそのま、詞のみ伝つたのである。意味右述べた如く、古事記載録の頃に意味の解らないことわざがあが、然様でも無い(近世まで職人は土地を持たず)。玉造のことわざは土地を持たぬ玉造の事を云ふのかとも思へる

ことわざの意味の展開したのが、誓約、訓論であつたからして、るって解らない歌は、ことわざの要素についてゐる。同かひなし」と云ひ、「はちを捨つ」と云ふ如きで、これになるとことわざと云ひ、「はちを捨つ」と云ふ如きで、これになるとことわざと云ひ、「はちを捨つ」と云ふ如きで、これになるとことわざと云ひ、「はちを捨つ」と云ふ如きで、これになるとことわざと云ひ、「はちを捨つ」と云ふ如きで、これになるとことわざと云ひ、「はちを捨つ」と云ふ如きで、これになるとことわざとってゐる。意味の時のである。意味の時のである。意味のだの意味の展開したのが、誓約、訓論であつたからして、るえて、

ものである。 を例へば伊勢物語 物語が平安朝に出来る起因となつたのである。少なくとも国名 大和物語の如く物語につける原因をなした

の起る原因があるのである。即ち女房が歌やことわざを日記中 伊勢物語を伊勢の御の作とするのも全々の嘘ではなく、 、この説

と云ふ女房の作と云はれたのである。 語と云ふやうになつてゐたので、伊勢物語もたまく~伊勢の御 に記入して置いたものの中より抜いて纏めたものを、誰々の物

平安朝の笑話の起る源となつて来るのである。 あつた。それが覚えられねばならぬところから平安朝の歌物語 唱へねばならぬものであつたから憶えなければならないもので 来たうた、ことわざは本は一種のふりの文句であつた。それは のりと、よごと、いはひごと、叙事詩(物語)から壊れて出て

### 六月廿一日

今日は此 あはれちはやぶる賀茂の社の姫小松 あはれ姫小松 2の前の例の適当でなかつたのを補つておく。 東遊の求 万世

春日神社の歌が出てゐる。 と云ふのである。これは賀茂の社のものであるが、古今集には 風俗の中の駿河歌といふのがある。 色は変らじ

経とも色はかは

あはれ

これは東遊の中に入つてゐるが、 とこそよしく 有度浜に駿河なる有度浜に 風俗である。 うちよする浪は七草の妹

> る。 これは、 その歌の初めの方でづゝと続いてゐる。 風俗の中にあ

八処女

原に立つ八処女人 八処女はわが八処女ぞ 立つや八処女人

神のやす高天

彼乃行

名のりぞせまし 尚鵠なりや とうく

かのゆくは雁か鵠か

雁ならばはれやとうく

雁ならば

右の二首の歌が接続すると駿河歌になる。この説は既にある。

丹波の真名井ヶ原から出たので、お酒の神から水の神、水の神 ために禊ぎをする者である。巫女の一種で、水に関係がある。 八処女とは、社で儛をする処女であるが、元貴い人とか、神の 元丹波国から出て、伊勢に行き、外宮に仕へた。外宮の神は、

あつたか、何うかは解らない。 つたが、宮廷の方は少なかつた。 八処女は、又宮廷にもあがつた。 しかしながら果たして八人で 伊勢の外宮の方は人数が多か

から五穀の神になつたのである。

ちらにもあると云ふ風で沢山あるが、これは競争して各地に出 と云ふ伝説のもとはこれである。この話はあちらにもある、こ 知つたのが東遊だと云はれてゐるが、謡の三保の天女が舞ふた 駿河の有度浜で千守の翁が砂に埋まつて天女の舞を盗み見して

等の沢山ある話をつゞめるとかうである――丹波の天の真名井 の話は誰も知つてゐる話で、八人の天女が天から降つて、水を 来たのであつて、元は有度浜の話から出てゐるのである。

は家を出て放浪する、と云ふのである。れる。翁の家は、その後栄えたが、翁は処女を追ひ出す。処女した。処女は、天に帰ることが出来ないで翁の家に連れて行かると、和名佐老夫がこれを見て、その天女の羽衣を隠

をしの歌もあれば、をしとたかべの歌もある。例へば、行」の歌は、訳の解らぬ歌であるが、八処女の歌と併せると処女が鵠になつて飛び立つのがよく解る。特に注意すべき事は、女が鵠になって飛び立つのがよく解る。特に注意すべき事は、なが鵠になって飛び立つのがよく解る。特に注意すべき事は、がりの歌もあれば、をしとたかべの歌もある。例へば、

鴛鴦 鸍 鴨さへ来居るはらの池のや……

さて、この東歌と云ふものは、前にも話したように風俗と一続

例へば、越後の国の歌を引けば、 圏へば、越後の国の歌を引けば、 関へば、越後の国の歌を引けば、 の採集せられた動機は分る。国ぶりの歌と同じことからである。 の採集せられた動機は分る。国ぶりの歌と同じことからである。 が大きである。 となつたからである。 となったからである。 となったからである。 となったからである。 となったからである。 との歌、越中の歌、豊後の歌、豊前の歌(これは豊後・豊前の 登の歌、越中の歌、豊後の歌、豊前の歌(これは豊後・豊前の であり、東遊は舞ふものとなったからである。 との歌、された動機は分る。 関へば、越後の国の歌を引けば、

歌となつてゐたものと考へる。

ふる(巻十六の三八八三) 弥彦のおのれ神さび、あを雲のたなびく日すら、小雨そほ

とあつて、その次に

弥彦の神の麓に、今日らもか鹿の、臥すらむ。裘着て、角

ゐるのである。

つきながら(同、三八八四)

が見える。この歌の切り方をかへると、次のやうになる。にある歌で、五・七・七の最後の七などはどこか無理なところか移りかけてゐる形だと云ふ事が判る。次第に変化して行く道これは、五・七・七・五・七・七の旋頭歌の形であるが、何だ

て 角つきながら 神のふもとに

今日らもか 鹿の臥すらむ

裘着

今の考へ方である。私は民謡から出た寿詞の形が、ほかひ人ののでの考へ方である。私は民謡から出た寿詞の形が、ほかひ人の歌は巻十六にある乞食者詠と較べるとよく分る。そのほかいびとの歌の二首は、一つは鹿のために痛みを述ぶる歌であり、一つは蟹の為に痛を述ぶる歌である。歌の内容は、降参して忠助をぬきんでる、即ち誓を立て、服従する歌である。高野氏は、当をぬきんでる、即ち誓を立て、服従する歌である。そのほかこの歌は鹿と蟹とにたとへて賤しい者が朝廷のために駆使させ、いびとの歌は巻十六にある乞食者詠と較べるとよく分る。そのほかこの歌は巻十六にある。歌の考へ方である。私は民謡から出た寿詞の形が、ほかひ人の今の考へ方である。私は民謡から出た寿詞の形が、ほかひ人の中の考へ方である。私は民謡から出た寿詞の形が、ほかひ人の

は鹿、海は蟹を詠んでゐる。ほかひ人の歌はこの二つを詠んでは鹿、海は蟹を詠んでみる。日かひ人の歌はこの二つになる。山の猟師の歌か、海の海人の歌かの二つに分けるやうである。時代を遡つて、東歌以外の万葉に於ける諸国の民謡を見ると、時代を遡つて、東歌以外の万葉に於ける諸国の民謡を見ると、時代を遡つて、東歌以外の万葉に於ける諸国の民謡を見ると、時代を遡つて、東歌以外の歌とは、同じ系統の歌である。この越後の国の歌と乞食者詠の歌とは、同じ系統の歌である。

ぎと云ふてゐるし、海の方はほがひと云ふてゐる になり、ひとの所属が混乱してしまつてゐる。山の方はことほ 奈良朝以前の形を見ると、海のほかひが次第に少なくなり、 和朝廷を見ても、海に近いところから山の中に入つて来てゐる。 ら山の神人になつて、 両方がある。元を云へば、 を先に云ふと、ほかひ人には山のことほぎと、 れが山のほかひに変つて来てゐる。それが、その間に種々雑駁 つたのである。つまり海人がほかひに来たのが、信仰の変化か ほかひ人のことについて話をしなければならないが、 山からことほぎに来るやうになつた。大 海のほかひが山のほかひに変つて行 海のほがひとの 結論 そ

> とは定められない。何故かと云ふと、恋歌は誓ひの歌であり、 歌がある。がしかし、それに全々まじなひ、鎮魂の意味が無

玉

[曲の歌の中に一見呪言の意味を取り出す事の出来ない様な恋

すると、そこから一方、又民謡が発達する。つまり叙事詩がほ た。そのほがひやことほぎの歌つた歌が断片化して遺つてゆく。 新しい神の呪術を持つて村々から信仰せられて利益せられてゐ 神の信仰を勧めて歩いた。と云ふより寧ろ、他の地方から見て、 ことほぎの連中は旧日本を廻り歩いて、自分達の神を宣伝し、 かひゞとやことほぎびとに持つて行かれて撒布せられてゐる間 短い歌が生れて来る。これが抒情詩の一つの発生である。 別の原因は、その国々に独自に発達をなした歌、まじな

又一方宮廷に行はれる。 り扱つてゐる。これが海人のほかひの歌として、 物語から出たもので、海部の歌である。これ等の方は恋愛を取 その他、記紀の天語歌(又神語歌)と云ふ種類は、 梨軽太子、並びに軽の大郎女の歌つた歌は、 分が多い。 恋歌の方では、ほかひ人の持つて歩いた歌が、 情の歌である。 相手の魂を屈服させるのである。恋歌は叙事詩の中の分れ、 山人のことほぎの文句は、 第に忘れられて、恋物語が云はれるやうになつたのである。 やうなもの許りでなく、それはまだ真面目の方で、誓ひが出次 ほかひゞとの持つて歩く歌は、必ずしも鹿や蟹が誓ひを立てる 日本の文学の上に恋心を開いて行つたと見なければならない部 云ひ立て文句になつてゐる。海人の諸国を廻つて行つた連中は 諸国の寿詞から恋歌が生れぬ訳ではない。 物語・物語歌の方に進み、山人の方は、 性慾的になつて、云ひ立て文句にな 海人の歌である。 原因となつて、 民間に行はれ 海人の 間の 抒

これが宮廷に行はれたのである 道筋が、ことほぎとほかひとをつきまぜた形で語られたので、 なつて勢力を得て卜部となるもとになつた。卜部となるまでの 諸国に恋物語を撒布した。その宮廷に入つたものは、平安朝に つて来る。海人の方は、

即ち

海人のほかひの歌は、 民間にも宮廷にも行はれて、 芸術化した。

今では、この二つが互に歩みよつて来て、国々の歌が出来たと 寿詞から断片化したもの、或は、諺と云ふものを考へて来た。 民俗芸術の起源であると考へてゐたが、寿詞と云ふもの、 今まで私は、海人や山人が持つて歩いた歌が日本の民間の文学: ひの歌がある。この二つが抒情詩の出発である。

一方、

ことほぎの方から文学は出来てゐるが、主として舞踊、或は単この様に海人と山人とが両方から次第に歩みよつて来る。山の山に這入つて、山人となつて了つた。安曇の地はその跡である。本の海岸線を遡つて行つた海人の方が、信濃川に沿ふて遡り、海人の方は信仰を持ち、山の方は芸術的の方面を失つた。北日

してゐる。
せでもほかひ人の中に、海人と山人とが混乱き通の人もある。昔でもほかひ人の中に、海大と山名の中には、で行く所に従つては、漁業をする事もある。また山窩の中には、の、中には必ずしも戸籍を脱れた連中許りではない。その移つは遊芸団体の総称にしてゐる。例へば、後世でも山窩と云ふもしてゐる。

にことほぎの云ひ立ての文句になつて了つた。海人は、後世で

ともかく海岸線、或ひは水に沿ふて歩いたのは、海人で、その

は、国曲の歌の中に、海の系統の海人の歌、及びそれから胚胎は、国曲の歌の中に、海の系統の海人の歌、及びうかれめが、海、河、街道を旅行して居つて、後世まで歌及びうかれめが、海、河、街道を旅行して居つて、後世まで歌及びうかれめが、海、河、街道を旅行して居つて、後世まで歌及びうかれめが、海、河、街道を旅行して居つて、後世まで歌た。これは大昔から近代までゞある。つまるところ、今日の話た。これは大昔から近代までゞある。つまるところ、今日の話に、種々まじりがある。山人は山にも籠つてゐた。海人の中には、種々まじりがある。山人は山にも籠つてゐた。海人の中には、種々まじりがある。山人は山にも籠つてゐた。海人の

これを分ければ、寿詞とほかひ人の物語から出てゐる物語からと云ふのは、くゞと云ふ草で編んだ籠の様な手にさげるものでと云ふのは、くゞと云ふ草で編んだ籠の様な手にさげるものでと云ふのは、くゞと云ふ草で編んだ籠の様な手にさげるものでと云ふ道具は、実は山人の持つて歩くものである。くゞつ字)と云ふ道具は、実は山人の持つて歩くものである。くゞつ字)と云ふ道具は、実は山人の持つて歩くものである。くゞつ字)と云ふ道具は、実は山人の持つて歩くものである。

## 踏歌と万葉集

成り立つてゐるものなのである。(昭和三年六月

つた。万葉集の葉の字の意味するところが、一は言の葉であり、のに対して考へ方が大分違つて来たから、歌の縁によつて今此のに対して考へ方が大分違つて来たから、歌の縁によつて今此処に少しく述べて置きたいと思ふ。 一つは万の言の葉であり、万葉集の意味は二つにとられてゐる。一つは万の言の葉であり、処に少しく述べて置きたいと思ふ。

ろで万代に伝ふべき歌集を万葉集と何故に云つたかゞ問題であつてゐる。この事を今日問題にするものは先づあるまい。とこ葉説が破れて、万葉集とは万代に伝ふべき歌集と云ふ事に定ま

の万葉集講義によつて最後の結着がつけられた。即ち万の言のの論議ではなかつたのである。この長い間の問題も山田孝雄氏らの懸案として両派家門の飾りとしてゐたところである。学問

一は代と云ふ事の形容であるとするのであつて、平安朝の末か

その証拠は、ほかひと云ふものが印象した道具、即ち外居(宛

海人許りではなく、中には山人もある。

した小唄がある。それが国の寿詞のエツセンスであると同じや

そのほかひそのものが、

の仮説である。諸君との共同研究によつて、この問題の発展を灯がついた様な気がする。証拠のないのが遺憾であるが、一つ歌集とせないで万葉集としたか。この問題に対して何だか近頃る、それならば後世の勅撰集、古今和歌集等の如く何故万葉和

伴家持が晩年失脚――彼は死後にも罰せられてゐる――した間ゐた。今迄の私の考へでは、万葉集中の大伴家の歌集は凡て大実を云ふと、私は今まで万葉集の成立について考へ方を誤つて

願ひたいと思つてゐる。

は残念ながら材料が無い。 (大伴家の資材が没収されて宮廷に入つた。その際に一緒に歌に大伴家の資材が没収されて宮廷に入つた。江戸時代に読んで居つた江戸文学の考へ方であつたらしい。江戸時代には財産没収の事が屡々あつたのだ。その歌が宮廷の大歌所へ入は財産没収の事が屡々あつたのだ。その歌が宮廷の大歌所へ入りであつた。これに比すると、今の説は仮説ではあるが、不安りであつた。これに比すると、今の説は仮説ではあるが、不安りであつた。これに比すると、今の説は仮説ではあるが、不安りであつた。これに比すると、今の説は仮説ではあるが、不安りであつた。これに比すると、今の説は仮説ではあるが、不安りであつた。これに比すると、今の説は仮説では、かったとしている。 は残念ながら材料が無い。

私には、巻五が旅人の歌集であることに対してもつと説明がいつがへされて、大伴旅人の歌集と云ふ事になつた。ところが、されてゐたが、武田祐吉、沢潟久孝二君の説によつて前説はくる。ところで、巻五は何か。是は今まで山上憶良の歌集と見なる。ところで、巻五は何か。是は今まで山上憶良の歌集と見なる。ところで、巻五は何か。是は今まで山上憶良の歌集と見なる。ところで、巻五は何か。最に対してもつと説明がいるまれてゐる中で殊れには、巻五が旅人の歌集であることに対してもつと説明がいる。

ると同様に、国風を編纂すると同じく、家々の歌を(宮廷に)歌集と見られる巻七がある。その他の巻にも藤原北家の歌集となると思ふ。賀茂真淵も昔の歌集には他はり藤原北家の歌集となると思ふ。賀茂真淵も昔の歌集には他はり藤原北家の歌集となると思ふ。賀茂真淵も昔の歌集には他はり藤原北家の歌集となると思ふ。もつともこのことは極くの人の歌も入つてゐると云つてゐる。もつともこのことは極くの大呼である。それにしても昔にこの事が判断出来れば、巻九がや歌集であると思っのである。大り、更に巻三、巻四も大伴家の歌集であると思ふのである。大り、更に巻三、巻四も大伴家の歌集であると思ふのである。大り、更に巻三、巻四も大伴家の歌集であると思ふのである。大

宴の歌を、宮廷へ服従の誓ひとして奉る。それが時代が下ると達の各主家に奉つた歌をも含んでゐる。すると昔の歌(家?)達の各主家に奉つた歌が集つて家集となつてゐる。これが歌集りまきの出入の人の歌が集つて家集となつてゐる。これが歌集のもとで、これを更に宮廷に奉つた。宮廷に奉るのは風俗歌をあると同じ考へによるのである。即ち自分の家の祝福の歌、集の歌を、宮廷へ服従の誓ひとして奉る。それが時代が下ると

同様に皇太子に奉つてあつた。その集が皇太子の廃せられるにた。)彼の家の歌集をば平安朝に教育の為に物語りを奉つたと臣が、長岡の宮の長官を殺したので、皇太子は廃せられて了つ場合で考へて見ると、彼は皇太子傅であつた。(この皇太子の分が養つてゐる育て君に奉るやうになつて来る。これを家持の

の教育の方便として、大和物語、伊勢物語における如く、

及んで、次の皇太子の弟の安殿の御子(平城天皇)の御手に入

らうと思ふ 家の巻七、巻九等も、或時期、機会に誰かに奉られたものであ 家々の祝賀の歌、宴の歌を編纂して奉る。その意味で、藤原北 生活を変化させて、彼の様に奈良の朝に執着をもたれた帝とな より自然である。かくして皇子の御手に入つた材料が皇子の内 つたのである。この間の事情を考へて見ねば解らないと思ふ。 つた、と考へるのは、財産没収によつて宮廷に入つたと考へる

学者の北家の歌集の中に入つてゐる。 等の歌が主になつてゐる。七、九の巻は主として漢学者の歌集 巻七、巻九に於ける主な歌人は高橋虫麿、田辺福麿で、この人 で、宇合が学問を好んだからして、彼の部下のみならず、 他の

巻五、巻三、巻四は如何なるものであらうか。

見ると、憶良は旅人に服従を誓つてゐる。例へば、 良とには似たところもあつた。それはともかくとして、巻五を 情と憶良の感情と交じつてゐるところがある。一体、旅人と憶 巻五を見ると、憶良らしい歌と思はれるものが多い。旅人の感

給はね(巻五の八八二) あがぬしのみたまたまひて、春さらば、奈良の都に召上げ

しては。旅人に服従を誓つてゐるのである。巻五を見て、憶良 歌は恐らく彼の本音ではあるまい。少なくとも筑前の守の歌と 等と云つてゐる。この如き歌を見、又貧窮問答の歌などを見る 大伴集は、二重の本である。大伴集の中に、又更に巻十七、 の歌だけ見ても、この事はよく判る。 単的に憶良が旅人に歌を見せてゐる理由が解る。これ等の 卷

> だとも思ふ のが、旅人の中に入つてゐる。私は旅人の歌、漢文が憶良の作 十八、巻十九は、家持の集であるが、巻五になると、憶良のも

巻三、巻四のくだらない編纂ぶりが解る。 たもの、、巻一、巻二の宮廷詩の形に似せて作つたものと見て 内容は大伴集である。大伴家に伝つてゐた在来の歌集を編纂し 巻三、巻四は、すつかり巻の一、二の形を襲ふてゐるが、その ゐる。大伴家に伝つた材料を宮廷詩の形に編纂した。とすると、

時の標準からして本体と見られたと考へてゐる。巻八、巻十は 私はそれは本体ではない。少なくとも巻八、巻十が万葉編纂当 般には巻一、巻二が万葉集の本体の如く考へられてゐるが、

四季雑と四季相聞の歌の並んでゐるところで、一つは無名作家

恐らくは平城天皇の御世のものと定めてゐる。八、十の巻々が してゐると見られるのである。)この巻八、巻十が万葉編纂当時、 においては有名作家、無名作家と同性質の集が二巻づ、対をな の、一つは名ある作家の作を集めたものである。(一体、万葉

巻一、巻二である。 本当の万葉集である。その巻八、巻十より古いもの、万葉集が

延喜五年一度払ひ下げられたのを再び奉つた際に古今和歌集と れた時には続万葉集と称せられたことが序文の中に見えてゐる。 るところと伝へる新撰万葉集があり、古今集も延喜四年に奉ら た歌集は只一つではない。古今和歌集と前後して菅原道真編す こ、で万葉集の説明をして置かねばならない。万葉集と呼ばれ

改めたのである(文学意識発生の為か?)。今からはもう判ら

この形は和漢朗詠集の前形である。又はその後の新撰朗詠集の 体したやうなもので、詩と歌との相似たものを並べ書いてゐる。 万葉集と万葉集と殆んど時代を同じくした懐風藻の作品とを合 新撰万葉集は、種々の万葉集とは違ふ、非常に変つたもので、 古万葉集と呼んだと見る方が自然であると私は信じてゐる。 万葉集と云つたのではなくして、多くの万葉集中一番古いから 現存の万葉集の事を古万葉集と称してゐた。漠然と古いから古 一つ前の形である。分類が正確でないだけ形を見れば判断がつ これ等の他にもつと万葉集と称せられたものがあつた もつとあつたと思はせるのは理由がある。平安朝には、

> 酔 曲は、

> 踏歌の歌の延長である。もとく、踏歌には朗詠と踏歌

国の音符を取り入れたものである。 安朝中頃)と云ひ、その少し新しいものが風俗である。歌に外 朗詠の本体は詩にある。歌の朗詠調のものはこれを催馬楽 新撰朗詠集と和漢朗詠集とを比較すると、そこには開きがある。 部分である。 朗詠は、支那の詩又は文の 伞

安朝 て女歌であつて、男の方が踏歌、 長いものから次第に断片的な文になつて来た。踏歌はすべて平 朗詠は上元の日に行はれた踏歌の踏歌章曲から起つた。これも この初めから詩が多くなつてゐる。奈良朝以前から歌の形 短歌又は長歌の短きもの――が沢山あつた。それは主とし (鎌倉時代の宴曲のおこり)に 女の方は歌になつた。それが

> る。現存してゐる万葉集の形には似てゐないが、巻八、巻十を 雑を恋歌のあとへ持つて行つてゐる。すると、古今集が一度続 しかし事実見ると四季の歌から恋歌に行くのは四季相聞の形で は歌が文学化して、相聞が比喩的な恋歌ではなくなつてゐる。 遊の歌を第一にして、 歌である。古今和歌集と万葉集とを比較すると、古今集では宴 万葉集と云はれた見当がつく。古今和歌集は万葉集に似せてゐ ある。万葉集を見ると雑の歌が先であるが、古今集においては それは踏歌の姿である。四季相聞と云ふのは、この男女の問答 宴によつて四季雑の歌を生む。それと同時に男女の問答がある。 で云ふ淵酔曲である。故に四季の歌がやかましくなるのである。 万葉集巻八、巻十の歌は、疑ひもなく宴遊の歌である。 の二つがあるわけである。その踏歌の時に歌ふ歌が問題になる。 次に恋歌を配列してゐる。古今集時分に

れた歌集があり、一番新しく出来た万葉集が両度の献上の時か 私は万葉集より古今和歌集が出るまでの間に種 中心として見た万葉集の形である。 々の万葉と呼ば

ところで、考へねばならぬ事は、何故に古今和歌集には文学的 のもの多く、万葉集には少なきか。その様な歌が万葉集、 ら古今和歌集と呼ばれるに至つたのであると思ふ。

集共何故に万葉の名中に入るかと云ふ事である。

歌が、 前にあつた。千載佳句を考へて、万葉集に遡つて見ると、万葉 万葉とは、つまり踏歌章曲である。 和歌である。 千載佳句と呼ばれる朗詠集が倭漢朗詠集の 宴遊の時の朗 詠の 時に歌ふ

淵酔曲が次第に歌 発達して行く。

一主として民謡

――の形をとつて来る。

淵

延長せられて宴会の時の淵酔曲

朗詠が踏歌によつて短く、歌ひ方も定つた時に、

てゐる。踏歌章曲には、千秋楽とか万春楽とか、万葉に似た名むのはこの故である。万葉と千載との両語は対句的に用ゐられが出来てゐるのだと思ふ。両巻に四季の雑、相聞の歌を沢山含で居れば目出度いのであつた。この意味で万葉集の巻八、巻十つてゐる。宴遊の時のみでなく、賀詞を云はないでも、只歌つ集の巻八、巻十の四季の歌の意味が宴遊の場合のお目出度を祝

# よろづよあられ!

前が沢山ある。

と万葉と云ふ詞も、天子の齢、寿ぎを万葉であるようにと祝福と云ふのと同じで、この如き囃し詞(天子の寿)がある。する

するのである。千載佳句、万葉章曲とでも名付くべき宴遊の歌

学史特講

が固定して、万葉とさへ云へば宴遊の歌、踏歌の歌と云ふ様に

いものと信じてゐる。又この意味の万葉の用語例が必ず手に入を探し出すことが今のところ出来ないのが憾である。論は正したゞこの事で、右述べた意味の万葉の、本当の使ひ方、用語例たゞる詞であり、その言葉を集めた言葉の集が、万葉集である。なつたのであらうと思ふ。故に万葉と云ふ言葉が天子の万葉をなつたのであらうと思ふ。故に万葉と云ふ言葉が天子の万葉を

約言すれば、

万葉集とは万世に伝へる歌集の意味ではなくして、

孝へられるのである。(以上、踏歌と万葉集 昭和三年九月文 なると、歌が文学的になつて来た為に万葉集と命名したのでは 気が済まなくなつた。そこで続万葉集と命名はせずして、和歌 を集めるのであるから古今和歌集と名づけたのであると思ふ。 を集めるのであるから古今和歌集と名づけたのであると思ふ。 味の上からすれば万葉集である。平安朝の初めの本当の万葉集 が巻八、巻十であつて、それ以前の宮廷の鎮魂の大歌集も、意 味の上からすれば万葉集である。そこで巻八、巻十と共にこれ 味の上からすれば万葉集である。それが古今和歌集に 天子の万葉を祝福する歌集の意味である。それが古今和歌集に 天子の万葉を祝福する歌集の意味である。それが古今和歌集に

して、国振の歌の項を了ひたい。 先学期から続いてゐた国風の歌の出発点の話の中の東歌の話を

たる魂を奉る。の誓ひの歌である。自分の守り魂、地方々々の君主の威力の源の誓ひの歌である。自分の守り魂、地方々々の君主の威力の源(一体、国振の歌は国の魂ふりの歌で、上の身分の人に奉る服従

以外に正確な形がある。それは即ち寿詞である。万代を祝ふ歌の意である。天子の万年を祝ふ歌にはも一つ万葉意でもなく、又万代に伝ふべき歌集の意でもなく、実は天子の中にもこれに似た話をしたが、万葉集と云ふのは万の言の葉の国の魂を捧げるのは服従を誓ふ事になる。前回の万葉集の話の国の魂を捧げるのは服従を誓ふ事になる。前回の万葉集の話の

奉るのが本式で、その副式のものが歌を奉る事になる。その歌寿詞とは、天子に奉るよごとである。氏々に伝つてゐる寿詞を

と東歌の話を致したい。

すれば、神が精霊に勝つに定つてゐる。精霊が答へない時は、も述べてゐると思ふ。これをもどき又はもどくと云ふ。もどきを破つて物を云ふ様になる。精霊が物を云ふ、即ちこと、ひをを破つて物を云ふ様になる。神が精霊にものを命令する。精霊は初い、し、まを守つてゐて何も答へない。その中に精霊がし、まときと述べてゐると思ふ。これをもどき又はもどくと云ふ。もどき

神はその征服をする事は出来ない。し、まを守つてゐた精霊が、

なくして、も一つは、物を一度云ふたが、しかしまだ怪しい、はもどくと云ふ。その形の他にこれと似たもどきの形がある。これを今まではもどく動作であると思つてゐたが、それだけではれを今まではもどく動作である。その事、即ち抗弁するのを普通ことゞひをしてつべこべ抗弁をする様になる。これが日本の身

同じ事を説明を変へて演出すると――。ともこの二通りの意味がある。――抗弁と、誤りのないようにに事を繰り返してするのであつて、日本のもどきには少なくどきと云ふのは抗弁をし、からかひをするのを云ひ、田楽のはする。田楽のもどきと云ふのは、主としてこれである。他のもする。田楽のもどきと云ふのは、主としてこれである。他のも

う、又は動作でも一度現はさうとする。これも後世もどきと称或は誤りがあるかも知れない、同じ事を違つた言葉で云ひ直さ

のであるが、歌垣と共に源流は一つである。宮中の御歌会は正月に行はれる。これと踏歌、非常に違つたも今からこの方の説明を、も少しして見たい。

歌 歌 踏 会 垣

歌合せから。<br/>
歌合せから。<br/>
歌合せから。<br/>
歌合せから。<br/>
歌合せから。<br/>
歌合せから。<br/>
歌合せから。<br/>
、立派な神事たる歌会は正月の他の日になり、次第歌合せから。<br/>
歌合せから。<br/>
この、<br/>
変化して後鳥羽院の頃になると変つて文学意識が出て来て、で変化して後鳥羽院の頃になると女房が原則であつて、女房式であつたらしい。歌合せに女房の参加するのは原則であつた。とされる。<br/>
しかし歌合せに女房の参加するのは原則であつた。とされる。<br/>
しかし歌合せに女房の参加するのは原則であつた。とされる。<br/>
しかし歌合せに女房の参加するのは原則であつた。とされる。<br/>
しかし歌合せに女房の参加するのは原則であつた。とされる。<br/>
しかし歌合せに女房の参加するのは原則であつた。とされる。<br/>
とされる。<br/>
しかし歌合せに女房の参加するのは原則であつた。<br/>
とされる。<br/>
とされる。<br/>
こかし歌合せに女房の参加するの他の日になり、次第<br/>
であると思ふ。<br/>第一に天子が女房となられて歌を発表する。このみになつたのは古いことである。<br/>
歌合せいち。<br/>
歌合せから。

つたか、形のみの想像はつく。例へば、額田女王が、天智天皇い。しかしながら万葉集を見ても、その形の如何なるものであるのだが、昔のは舞が入つてゐる。その分化したものが歌合を初めには、舞は勿論なくて、よい加減な歌人が集つてやつて会るのだが、昔のは舞が入つてゐる。その分化したものが歌合ない行事である。在原行平や宇多天皇の歌合せ等の外には訣らない行事である。在原行平や宇多天皇の歌合せ等の外には訣らないである。在原行平や宇多天皇の歌合の分化したものである。歌会初めは歌合せは宮廷の正月の歌会の分化したものである。歌会初めは歌合せは宮廷の正月の歌会の分化したものである。歌会初めは

短歌の中としてゐる須佐之男命の歌等は新しいものである。歌歌は、正式の歌の中では一番新しいもの故に、そんな事はない。神聖な行事だから正月の初めに行ふとしたのは空想である。短何故に歌会が正月に行はれたのであらうか。今迄の考への如く

は、正月の朝賀の式の後に歌ふ歌で、疑ひもなく直会の時の歌し変化させて宮廷の大歌所の大直日の歌としたのである。これ即ち古今集巻二十の一番先に大歌所の歌がある。その真先に大即ち声の集巻二十の一番先に大歌所の歌がある。その真先に大の寿詞のもどきである復演であると考へる。それはよく判る。

私は歌会は、新年の朝賀の節に多くの氏の上が寿詞を奉る。そ

会には、もとは短歌のみでなく他の形式の歌も出たのである。

呪詞を唱へると、その通りの結果が出て来る。ひよつとして呪何故に直会の歌が、大直日の歌となるのか。

続紀の歌は、

何故であらうか。

である。では、大直日と直会とは同じかと云ふと左様ではない。

では、神の言葉たる呪詞には誤りはないと信じていた生ずる。昔は、神の言葉たる呪詞には誤りはないと信じていたま、この神は日向の橋の檍原の禊の時に出現した神になって来た。この神は日向の橋の檍原の禊の時に出現した神になって来た。この神は日向の橋の檍原の禊の時に出現した神になって来た。この神は日向の橋の檍原の禊の時に出現した神になって来た。この神は日向の橋の檍原の禊の時に出現した神になって来た。この神は日向の橋の檍原の禊の時に出現した神になって来た。この神は日向の橋の檍原の禊の時に出現した神になってみる。直日の神は、善の神ではない。本居宣長頃より直日御である。直日の神は、善の神ではない。本居宣長頃より直日御神の発動を促す。

新しき年の初めにかくしこそ 千歳をかねて たのしきを古今集の歌がよく解ける。即ち大直日の神の神性発現を願ふ、
正旦朝賀の節の直会に歌ふ。それが大直日の歌である。すると
元旦朝賀の節の直会に歌ふ。それが大直日の歌である。すると
正式な祭に付属して直会は直日の神を主として祭る祭りである。

と解く人もある。何時々々までも木を積んで宮廷を祝ひませう。しきをつめ」と訓んで、御薪木の木を沢山詰めて云ふのであるを持つて来て、置いて行く式が宮廷に入つたものである。「楽ゐる人があるが、誤りである。これは、山の精霊が里へ御薪木楽しきをへめをつめと考へて、宮廷の春の御薪木の式と考へて楽しきをへめをつめと考へて、宮廷の春の御薪木の式と考へて

新しき年の初めに かくしこそつかへまつらめ 万代まで

即いて了つてゐる。平安朝早く既に直会とうたげと接近してゐ楽しき事をしよう、と云ふのである。すると、直会がうたげととある。新年の初めに毎年々々この通り今から予め千年までも

言葉を違へて(歌)、も一度復演するのである。大歌所の歌は、直会の歌である。直会は、前に一度述べた事をる。しかし、祭りと直会とうたげは別のものである。古今集の

る。、大抵、六衛府北面、瀧口等の武士の間から召されるのであき大歌所に召される)も召された。召人は、多く地下の士であきが参加した形の遺つたものである。女房と共に、召人(今で歌会を見ると、必ず女房が参加してゐる。これは、後宮の釆女歌会を見ると、必ず女房が参加してゐる。これは、後宮の釆女歌会を見ると、必ず女房が参加してゐる。

た。これは召人として武士が特別に召される為である。武士がた。これは召人として武士が特別に召される為である。武士がが発達して、源頼政、佐藤義清、藤原秀能等が出るやうになつれない時分に采女と舎人(随身)とが国振の歌の掛け合ひをし吏が代行するやうになる。この寿詞に対して、歌会で直会の離れない時分に采女と舎人(随身)とが国振の歌の掛け合ひをした。為に歌合せは女房が主体となり、同時に歌合せに武士が参た。為に歌合せは女房が主体となり、同時に歌合せに武士が参が発達して、源頼政、佐藤義清、藤原秀能等が出るやうになつ離れない時分になる。歌行では、歌会の本体は女房と武官とにあつたと思ふ。宮私の考へでは、歌会の本体は女房と武官とにあつたと思ふ。宮

て召されることもあつた。武士の歌が独立したのはかうした事召されるものは、随身のみに限らず、地位ある者でも召人とし

情によつてゞある。

会として大直日の神を中心とした歌の掛け合ひがあり、采女、の後を継いだものである。女房は、栗女の後の形である。とにの後を継いだものである。女房は、采女の後の形である。とにかく武官の歌は、然様した来歴から出発して来たのである。古かく武官の歌との五種類がある。女房の歌と云ふのは、采女の系統寺家の歌との五種類がある。女房の歌と云ふのは、采女の系統寺家の歌との正を担けるのである。とにの後を継いだもの神を中心とした歌の掛け合ひがあり、采女、

の歌を奏することが起つて来た。寿詞に述べたと同じことを言は、氏の上、長官が、寿詞を奏し、直会の大直日の式には国振掛け合はずともよい訳である。国風の歌を然様する。朝賀の時ぬる。正月上元の日の歌垣の式が合理化して一緒になつて来た。合せて掛け合ひをした。これには、踏歌又は歌垣の式が入つて随身が出て、国振の歌を掛け合つた。何処の采女、随身と組み

諸国の采女と舎人とが同国の国振の歌を掛け合ひしたところかび歌会のもとの朝賀の式後に行はれた直会の式であつた。のであつたが、これも後には男女が混じあつて組むに至つた。のであつたが、これも後には男女が混じあつて組むに至つた。は拡まつて来た。しかして結局宮廷の行事の中、最も歌を重んは拡まつて来た。しかして結局宮廷の行事の中、最も歌を含せるがよいて来た。而して歌会においては掛け合ひは止めて、掛け合業を替へて繰り返すのである。その中に次第に直会と歌会とに

近江振の歌の話の初めに云つたかも知れないが、小野小町は陸ゐる。この時には、多く国振の替へ唱歌が歌はれたと思ふ。ら起つて、自分等が自分の親の代表として服従の誓ひを立て、

は、加賀の白山は、今は加賀の国の山と云ふ事になつてゐるが、ところが、昔の境界は何処までが本当か不明である。その一例問題である。小野の一番の本は、山城の叡山の西山麓である。たと伝へられてゐる。小野小町が果して出羽から出たか否かは奥国出羽国の郡司小野良実の娘であると云ふ。外に姉妹があつ

る。黒主は謡曲等では悪人にされてゐる。しかし、この人は舎る。黒主は謡曲等では悪人にされてゐる。この大友村主から出たのが、大友民の根拠、の叡山の南東麓、長良等の山下の三井寺辺は、大友氏の根拠、大友村主の根拠地である。小野は、叡山を考への元として考へる時には、近江に属したのである。小野は、叡山を考への元として考へる時富士山は甲斐の国の山であり、叡山は近江に属し、その麓は近

昔は、大抵、山は何処の国のものと定まるのである。例へば、国の範囲を持つてゐるものである。広い領域のある山である。長い間何処の国にも属して居なかつた。強いて云へば、白山の

廷に来て歌つた話である。(昭和三年九月二十七日)をに来て歌つた話である。(昭和三年九月二十七日)とにかく今の話は宮廷に住み込んでゐる人々が、国振の歌を奏て、後世こんな話が出たものと見られさうに思はれる。とにかく今の話は宮廷に住み込んでゐる人々が、国振の歌を奏とにかく今の話が出来て来る根拠は采女と舎人との歌合せがあつる。この黒主と小町との「草子洗ひ」の話があ人出の歌人である。(昭和三年九月二十七日)

神楽・催馬楽

ふのは、神前の奏楽舞踊をすべて云ふのである。近世では神遊の他に東等の神楽をも含み込めて、神遊びと云ふ。神遊びと云の他に東等の御神楽と云ふものは、純然たる神楽である。そ神楽、清暑堂の御神楽と云ふものは、純然たる神楽である。そ神遊びと云ふ名称は広いものであつて、神楽はその一部を云ふ。まづ最初に神楽と神遊びの区別からして話して行く。

た。 区別があつた。遊ぶと云ふのが一番正しく、広い唱へ方であつ区別があつた。遊ぶと云ふのが一番正しく、広い唱へ方であつ神楽なる名称によつて称し去つて了ふやうになつたが、もとはが夏祭の祇園囃子、又は木遣りである。そして、凡てのものをと云つて差支へない。ごく近くまで続いて行はれて来てゐるのと云つて差支へない。ごく近くまで続いて行はれて来てゐるの 神遊びが神楽と呼ばれるやうになつた先駈けは、

夏神楽である

びを神楽と称するやうになつてゐる。

魂をえぶるのである。えぶるは地方によると訛つていぶる等とめる丈であるが、遊ぶの方にはまだ意味がある。即ちゆるがすない。遊ぶと云ふ事と舞ふと云ふ事とは区別があるに違ひない。遊ぶと云ふすとの区別を考へるに当つて、視点は二つある。ない。遊ぶと云ふすとの区別を考へるに当つて、視点は二つある。ない。遊ぶと云ふすとかであって、踊るとは元来は、はねることしたものは新しいものであって、踊るとは元来は、はねることしたものは新しいものであって、踊るとは元来は、はねることであつた。その舞踊の仕方が問遊ぶとは、古くは舞踊することであつた。その舞踊の仕方が問遊ぶとは、古くは舞踊することであつた。その舞踊の仕方が問遊ぶとは、古くは舞踊することであった。その舞踊の仕方が問

も云ふ。魂をえぶる動作が遊ぶであるらしい。遊びによつて魂

来る。 らしい。動作を伴ふと云ふことで、遊ぶが漠然とながら定つてらしい。動作を伴ふと云ふことで、遊ぶが漠然とながら定つて

ことである。これは魂をえぶる事である。仮りにかう区別をつるいた。古くは遊猟などに用ゐてゐる。この遊ぶに云ふやうになつた。古くは遊猟などに用ゐてゐる。この遊ぶにをつけるのが、とりのあそびである。獣猟りも何かこれに類しを可けるのが、とりのあそびである。獣猟りも何かこれに類したですがあつたと思ふ。平安朝前にあつては猟をすることを遊ぶと云つてゐる。一寸考へると変にも思ふが、よく考へて見ればとってゐる。一寸考へると変にも思ふが、よく考へて見ればとってゐる。これは魂をえぶる事である。仮りにかう区別をつることである。これは魂をえぶる事である。仮りにかう区別をつることである。これは魂をえぶる事である。仮りにかう区別をつる。

 けて置いて話を進めて見る。

これも順当ではない――天の岩戸の神遊びのときにした遊びが神楽歌譜に採録せられてゐるものまで神遊びと称してゐるが、ないと思ふ。国学等云ふものは何でも古い方がよいと考へて、と称せらるゝもの。岩戸神楽と云ふのは純正な日本語とは云へと称せらるゝもの。岩戸神楽と云ふのは純正な日本語とは云へとがと思ふ。国学等云ふものは何でも古い方がようと東頭するものである。天の岩戸の神遊び―普通に岩戸神楽喪ひの時に死人の魂を呼び返して人の身体に完全につけようと

考へてゐる為に、遊部と岩戸との関係がついて来る。あそびの起源で、同時に遊部の起源はこゝに緒を発する。かう

遊部は、専ら喪式に与ることになつてゐる。この事は、

前にも

に入れてやらうとした。生――仮死の――も死も、ほんやりししてゐるのさへも一緒に考へて、その間に遊びをして魂を身体死の状態にある人も同じと考へ、更に進むとぼかんとして自失死の状態にあるが、日本人の生死のお、本当に死んだ人も仮のった。事があるが、日本人の生死の考へ方は非常に曖昧であつ述べた事があるが、日本人の生死の考へ方は非常に曖昧であつ

がら物の云へない、即ち魂の抜けた人であつた。かくの如く、て物を云ひ出したと云ふ。これ等の話は生きてゐる人でありな云はなかつた。ところが天馳る鵠――白鳥の声を聞いて、初めれてやつたと云ふ。又本牟智和気御子は生れながらにして物をれてやったと云ふ。又本牟智和気御子は生れながらにして物をしてゐる話は味鉏高日子根の神の話によつても知られる。このしてゐる話は味鉏高日子根の神の話によつても知られる。この

ふだけでは死とは考へられない。しかして又生とも云へない。死の観念を知らない為である。天照大神が岩戸に籠られたと云へり、その期間に遊びをしても魂の入らないものが、初めて死んだと考へられたのである。天の岩戸は、太古の喪式を物語るものであると考へてゐる学者もあるが、それは古への日本人のものであると考へてゐる学者もあるが、それは正ものも不と言かてゐた。それが遊びをすることによつて魂が入つて来て生きかてゐた。それが遊びをすることによつて魂が入つて来て生きかれたは死も仮死も、ぼんやりしたのも三通りを混同して考へ

と生との混同については話した事がある。魂が抜けてぼんやりた人――白痴の如きも――、皆一つに考へてゐたのである。死

来たと学者が考へて来た。せが進んで来ると、魂をつけるのを皆遊びとは云はないで、三世が進んで来ると、魂をつけるのを皆遊びとは云はないで、三かの間に遊びによつて魂を入れようとしただけなのである。

見せる為である。元は、皆あそびと称せられたのであつた。こなると、神遊びと云ふ語が出来た。遊部のあそびと違ふことをなると、神遊びと云ふ語が出来た。遊部のあそびと違ふことを云ふ穢れが何処まであるのか不明である。古へは息を引き取つ我々は、神遊びと云ふと死の穢れが無いと思ふてゐる。神道で

ある。

重い鎮魂がも一つある。即ち自分等の周囲にある悪い魂を抑へ又は遊離した魂を身に収めようとすることを云つた。この他に身の内に入れることであつた。後には身体から遊離しようとし、鎮魂には二通りある。少なくとも古い鎮魂は外部の有名な魂を

そこで考へるのは鎮魂である。

の神遊びは、死からすつかり離れた神聖なあそびの仕事である。

の鎮魂は悪い魂を抑へる方でまふの方である。定を一つの言葉が含むのである。これがあそぶである。も一つに魂を身に着けやうとしてゐる動作である。そんな二つの仮ふ事になる。外より有力の魂を取つて来る事が変化して、遊離

であるが、時にまぎれる事はある。神遊びの方はそこでかう云つけようとする考へ方の鎮魂である。これは、前の鎮魂とは別

ふ。宿老の飜訳であらう。

て成り立たない。しかしながら事実では舞人と云つてゐる。し正確には、神楽には舞人と云ふものはない筈である。言葉とし

とは――あそび――とは別にせねばならぬ。かし少なくとも地上の魂を鎮める舞と外の魂をえぶり込む動作

神楽には舞をする人長がある。これに対して才男がある。

皆武官の姿をして舞ふ。これには武官が舞に与る訳があるので武官から出るかについては後に述べるが、一体日本流の舞ひは朝の事実を以て見ると、両者武官の出である。これ等が何故に

の宛字ではないか、人長は神人の頭の飜訳の意ではないかと思されてゐる。所によると、例へば信州の諏訪ではじんちやうとされてゐる。所によると、例へば信州の諏訪ではじんちやうとった。人長は舞人の長ではなくして、宮司、大視、祝、祢宜とある。祢云ふて、舞人ではなくして、宮司、大視、祝、祢宜とある。祢石巻を云ふ事になると思ふ。宿老とは公の行事のある時にの宿老を云ふ事になると思ふ。宿老とは公の行事のある時にの宛字ではないか、人長は神人の頭の飜訳の意ではないかと思った。

るが、両者の間には区別がある。手草とは手に持つところの禁舞はれたのは手草であつて、よく採物と同じ様に考へられてみ終混同せられるのは手草である。鈿女の神が左右の手に持つて長の持つて出る道具によつて、歌、舞が違つて来る。採物と始種類ある。二つゞつ対立してゐて、その替へ歌は沢山ある。人

忌で神人のしむぼるである。首や頭にく、り附けても手に持つ

の道具で魂をえぶり、ゆすり、動かし、宥めるのである。廻すものであつて、手草の様なものでは無い。採物にて、種々てもよい。手のものと云ふ事である。これに対して採物とは振

もやはり採物の歌がある。そして神楽の採物の歌と種類は殆んである。 でるのである。何かと云ふとそれ等は魂を目覚めさせる道具で、 であの手順によつて色々の道具が出来て、更に魂を身体に移 事の後の手順によつて色々の道具が出来て、更に魂を身体に移 す仕事を分けて行ふた。だからして採物の歌は普通の神楽固有 のものでなく、神楽の一つ前に広い神遊に採物の歌があつた。 採物を採つて舞ふ歌の言葉があつた。その他としては、鎮魂祭 の時に鎮魂歌、たまふりの時にたまふりの歌を歌ふが、それに の時に鎮魂歌、たまふりの時にたまふりの歌を歌ふが、それに の時に鎮魂歌、たまふりの時にたまふりの歌を歌ふが、それに の時に鎮魂歌、たまふりの時にたまふりの歌を歌ふが、それに の時に鎮魂歌、たまふりの時にたまふりの歌を歌ふが、それに の時に鎮魂歌、たまふりの時にたまふりの歌を歌ふが、それに の時に鎮魂歌、たまふりの時にたまふりの歌を歌ふが、それに

採物の歌は、比較的新しい事もよく解る。先づこれが神楽の本くなつて来るので、時代の理解によつて改作が重ねて行はれてくなつて来るが、大体平安朝五十年、百年頃からそろ~~固定れものもあるが、大体平安朝五十年、百年頃からそろ~~固定れものもあるが、大体平安朝五十年、百年頃からそろ~~固定れる。だから存外新しい形がその中に含まれてゐる。そして現る。だから見て解らんところもないである。今の神楽歌の中には古れるのであるがらして時を経るに従つて解らな元来鎮魂歌は古いものであるからして時を経るに従つて解らな元来鎮魂歌は古いものであるからして時を経るに従つて解らな

せずに、ある時期に魂が身体に帰ればよいと、どん~~ついてまごひは人の死んだ時に行はれるに定つてゐる。そんな手段を存で叩いて呼び出されるのと、人の死んだ時には山へでも行つ体で叩く。するとこの音で魂が呼び出されて来る。端的にへな鉾で叩く。するとこの音で魂が呼び出されて来る。端的にへかりしてゐる魂をどん~~叩く。日本人は仮定の条件を作つつかりしてゐる魂をどん~~叩く。日本人は仮定の条件を作つ

び歌と云つてゐる故に古今集には、神楽歌でないものも入つてび歌と云つてゐる故に古今集には、神楽歌でないものも入つている。。しかし、これは元は尊い魂を呼ぶものであつた。又杓も神とは関係が深い。瓢箪を二つ割りにした杓で、古今集にも神歌とは関係が深い。瓢箪を二つ割りにした杓で、古今集にも神歌とは関係が深い。瓢箪を二つ割りにした杓で、古今集にも神歌とは関係が深い。瓢箪を二つ割りにした杓で、古今集にも神歌とは関係が深い。瓢箪を二つ割りにした杓で、古今集に近いもの事に使つた。光柳を神聖なもので魂をえぶる仕ば剣、杓、等を持つて来て、これ等神聖なもので魂をえぶる仕ば剣、杓、等を持つて来て、これ等神聖なもので魂をえぶる仕ば剣、杓、等を持つて来て、これ等神聖なものも入つてび歌と云つてゐる故に古今集には、神楽歌でないものも入つてび歌と云つてゐる故に古今集には、神楽歌でないものも入つてび歌と云つてゐる故に古今集には、神楽歌でないものも入つてび歌と云つてゐる故に古今集には、神楽歌でないものも入つて

ど同じであるが、たゞ歌が違ふ

我が門の板井の清水 里遠み 人し汲まねば 水草生ひに

ゐる。 。

けれども、里が遠く人が来て汲まないから水草が生えた。これ気持の悪くない歌である。私の家の板で囲つてある清水はよいけり

鉾の説明をせねばならない。

鈿女の命が、

鉾を持つて舞ひ、

う

体である。

鉾が採物の中心をなすものであつて、鉾がなければ魂の呼びさ

はちまき鉾を持つて舞うて正しい神聖なものと云ふ心で叩いた。魂の呼び覚しをする。この役をするのが鉾である。天宇受売命

採物の効果を云はないものが多い。鎮魂歌の方では云つてゐる。 考へ物式のものである。神楽歌の採物の歌を見ると、この如く は清水の歌である。水を汲むと云ふ事から杓の歌になると云ふ

陸奥のあだちの檀 わが引かば 末さへより来 しのび

陸奥のあだちの山にある檀の木を我が引いてゐる。だからして

根の末までも手に引かれて寄つてお出で、忍びくへに。第五句

謡から出た歌で表面上、弓の歌でも何でもない。でも弓の歌に 歌にとりなしてゐる。大体に於て然様のものである。あまり採 が私に信頼して来いと云ふ事になつて、恋歌となつてゐる。 た。それを弓の歌と感じ、更に神を呼び出す歌に感じて、弓の て来る。転義して、かく私が女を引いたならばとして恋歌にし ならない事もない。引かれて魂が寄つて来るから弓の連想が出 民

義を失つてゐる。

が新しい。 天に在す酒神豊おか姫の幣である。 御幣は我がにはあらじ 天に在す豊おか媛の神の御幣

物の目的に関係の多いのや、関係がありさうに見えるのは感興

幣にならましものを 皇神の御手にとられて なづさはま

たり合つてゐるのは新しい。古くは他の歌を転用した程度であ 嫌な歌である。こんな歌は新しいものである。歌の効果とぴつ

榊の歌でも

きねは巫女達を指したものであらう。採物の効果を云つてはゐ 霜八度おけど枯せぬ榊葉は 立ち栄ゆべき神のきねかも

> ともかく形から見ると神楽歌より古いものである。 して見ると鎮魂歌と云ふものはそんなに古いものではないが 舞ふ訳には行かぬから、あり来りの文句を使つたものである。 ない。榊の歌を採物に借用してゐるだけである。何も云はずに

歌が出来て、無意味なものとなつた。それが又無意味だと云ふ 採物を一度採れば何うなると述べてゐる。古いもの、 なつた。結局神楽歌は、初めから出来た時代から採物根本の意 ので直接効果を示すようなものに改めた露骨な解り易いものに その替

ない。 神楽歌譜は、平安朝五十年頃より一条帝頃までに記録を生じて は手草の歌である。神楽よりもつと前にはこれでは説明がつか なく、神楽の事は採物の意義を知らずに伝へた故に神楽の採物 来た。替へ歌も出来るが、採物の名前だけで実際の神楽のでは

詞である。九州志賀島に阿度目磯良神がある。 採物となる。神楽の阿知女作法とは、元来神の名である固有名 と云ふのがある。初めに庭燎を焚く、次が阿知女作法で、次が 神楽には起源の伝説がある。神楽の仕組を見ると、「阿知女作法 これは海士の神

阿知女。於々々々(本)

於介。阿知女。於々々々

(末)

である。阿知女作法とは、

とは呼ばれて答ふる神の声である。これは両方に対立してせね 歌の初めの「阿知女」は、阿度目磯良神を呼ぶので、於々々々 これは問答である。乎々と答ふべきを於にして表したのである。

た。神々が昼間働いてゐるのに、一言主は夜出て来て仕事をし られるのを嫌つて海からなかく〜出て来ない。この様に醜と云 時に磯良は身にかき貝、みるめ等のついてゐて醜いので兒を見 士の神であるが、神功皇后が三韓征伐の時に筑前で神を集めた なると、人として神功皇后に仕へた事になつてゐる。然しこれ この神楽の伝説は阿度目磯良と考へられてゐる神である。 ばならない。恐らく人長等の男の如く対立したものがやるので た為に工程が遅れたと。それに即いて芭蕉の句がある。 行者が大和の葛木山に神々を集めた時に一言主の神が来なかつ ふ理由の下に召出されても出て来ない話は多い。例へば、 は海士の神である。安曇は海士を支配する家である。磯良は海 云はれてゐる。阿知女とは何かと云ふと、安曇と云ふ事である。 ゐるものと云はれてゐる。 あつて、何のことか不明であるが、神楽のもとの由来を見せて 阿知女は鈿女と云ふべきだと昔から 役の

をしたと云ふ。それから神楽が起つた。載つてゐる。磯良も招かれて遂に出て来て、皇軍の御舟の守りよりもつと真に近いと思はれる伝説である。この話は太平記にめて神楽を行つたと云ふのは、岩戸神楽が神楽の源流と云ふの醜い神があつたのである。醜い阿度目磯良神を呼び出す為に初なほ見たしはなにあけゆく神の顔

阿知女作法が初めにあるのは神楽がはじまる徴である。

阿知女

然様に磯良神は神楽と関係がある。神楽の中に「磯良が前」とで、これから神楽の序開きとなるのである。

云ふのがあるが、これを行ふと凶事があると云ふので、ずつと

いせじまや あまのとねらが たくほのけ いそらがさき

前から封じられてゐる。

宿老とは町のとね、村のとね等ある。山のとねは平安朝には山にかをりあふ

神楽である。 なつた。神楽は安曇流の神遊びでなければ、 士の間の神遊びが、ある時期に宮廷に入つて、宮廷の御神楽に が、安曇の系統の神遊びが、即ち神楽と称するものである。 るやうに見える。一体この事は神楽について云はねばならない には関係がないが、もと磯良に関係あるものがあつたに違ひな たつて、もやくくしてゐる、と云ふのであつて、一見磯良の事 老等が焚く火のいぶり気が匂ひ立つて、向ふの磯良が前に香り 賊になつてゐる。これは山の神人の頭であつた。 神遊びには採物が本体であるが、少なくとも神楽歌では、それ 入れたから、 いのである、と私は思ふ。安曇、又は海士の間の鎮魂の舞踊 い。これは古くより歌はないものとなつてゐる。考へて見ると で来て山賊と見られる様になつた。歌意は、伊勢島や海士の長 「磯良が前」、神楽の先の阿知女作法と共に神楽全体の意義を語 それが次第に宮廷の鎮魂の術と似て来て宮廷に取 似せて採物を入れて来たと見るのが本当である。 神楽と称せられな 生活が荒さん

る。 られないことは珍しくないからである。だから典拠がないと云 ふ証拠にはならない。古くよりあつた事物で、書物に書き留め は遡れないが、これは必ずしも神楽が平安朝前になかつたと云 神楽の成立は割合に遅れ、書物によつて調べると平安朝以前に 宮廷の神楽は、初めに云ひし如く神遊びの新しいものである。 らうかと見える。この神楽が宮廷に入る手順を話さねばならぬ を本体とする鎮魂歌から取入れて、今では本体に見えるのであ しかし静に見ると採物をつけた歌が本当の神楽歌ではなか

を述べて置いたが、も一つ考へると、も少しその根拠となるべ 前回には、神楽は何故に海士と関係があるかと云ふひんとだけ た名が神遊びであつて、その一部分が神楽である。 ほど形式が整備して来る。だから成立が遅いと云へる。総括し ふ事のみで定める事は出来ない。神楽は、平安朝の中頃になる

深い人々である。 き事が出て来る。それは宮廷の神楽をした連中は海士に関係の

ら来た神で、まづ九州に来、それが拡つて、更に東上して、 士の祖先が八幡に仕へてゐたと云ふ伝説がある。この神は西か る。その系統のものだと云ふ事は石清水八幡は海士と関係が深 とにするが、神楽歌譜の現存伝本は石清水八幡系統のものであ 新作の他に色々のものが入つてゐる。この考証は段々述べるこ 私も前述したが、この神楽は、現存の神楽歌譜に載つてゐるも い事で知られる。 のは、鎮魂祭の歌の新しいもので、言は、鎮魂歌の替へ歌であ 鎮魂歌の重要なものは採物のみであるが、神楽には採物の 八幡が直に海士の神と云ふのではないが、 京 海

> 伴信友さへも唱へて居り、故八代国治氏にも八幡考が出てゐる。 神たる事が判る。もう疑ひの無い事実であつて、この事は既に して来た勢力の中の有力なものである。 盛んに流行した固である。この神の勢力は西より始終東に及ぼ しかしながら蕃神たる新来神と云ふ事が、八幡信仰が奈良朝に の石清水に鎮座したのである。この足どりからしても八幡の

八幡神の性格にもいろんな見解がある。その中で悪神であつた

た。八幡のみでなく一種の恐ろしい力を持つてゐて、 が、それを見ても、一種の恐ろしい力を持つたもの、形であつ なつてゐる。以前に僧形八幡が私の生家に来て居つた事がある 悪いと云ふので八幡自身が悪く見える。今では八幡はよい神に 幡神もやはりそれである。その部下が悪い、又は八幡の子供も に負へなかつたが、その力で悪物を抑へて行つたのである。 いとい、事が出来ないとされてゐた。須佐之男の神も狂暴で手 か否かと云ふ事が見方の大切な点である。日本の神は狂暴でな

子ではなく、例へば八幡の法を守る部下にせられた巨人になつ 宮と称して、その神の御子にしてゐる。しかしながら古くは御 古くは力を持つたものが部下の巨人を作つた。それを後には若 古い時代の神であつて、古く神の作り方には二通りあつた。 者を抑へつけて部下にする力――、部下を増して来る。 八幡は仏教家の陰陽道者が将来した神ではないかと思はれる。 未だここまで云ひ切つて了つてよいか、何うか、 てゐた。丁度仏教における天部の神と仏との関係である 不明であるが、 これ

どうも然様ではないかと思はれる。純粋の天竺のものではない

つては前住の土地土地の信仰の神を巨人として八幡神の臣下と須佐之男命が牛頭天王、又は武塔天神と云はれる様に、八幡にうんで行く。それを初めは八幡神の従者として扱つてゐたが、次第に父神と子神との関係になつて来てゐる、と思ふ。これは次第に父神と子神との関係になつて来てゐる、と思ふ。これは日本神道の古へ方にもよつたものであらうが、八幡の信仰にあっては前住の土地土地の信仰の神を巨人として八幡神の臣下とかまに、子神と一人として八幡神の臣下とのない。

この八幡の信仰で出て来るものは、大体人形である。

人形は忠

へて行く。

なし、その土地の八幡信仰の受持ちにすると同時に、悪病を圧

の巨人の伝説は大抵これに属するものである。大人弥五郎、大その人形の歩いたところに巨人の信仰が起る。日本の中世以後八幡の伴神として土地の神を巨人に見たて、人形であらはす、

中に投入れるところもあるが。志賀島の祭りでは今までの説は

はあいぬの住まなかつたところにもある。

記憶によると説かれてゐるが、これは別の事である。

巨人伝説

出て来る。 太郎法師等といはれるのは、平家の終りに肥前の姥が嶽の話に

通つた昔の巨人伝説を更に力づよくした。 通つた昔の巨人伝説を更に力づよくした。 通つた昔の巨人伝説を更に力づよくした。 通つた昔の巨人伝説を更に力づよくした。

廻しにえびすかきに、皆海士の系統である。 いた一記念で、古くなると、海部の民と八幡神との関係 はもつと明らかである。海士の人形が傀儡師へ、更に、人形 のと後まである。傀儡師の人形廻しは人形廻しの歴史では大切 なものである。人形の存在を無視して室町の初めに淡路の島か なものである。人形の存在を無視して室町の初めに淡路の島か なものである。人形の存在を無視して室町の初めに淡路の島か なものである。のも人形である。これがず のと後まである。海士の遺ふのも人形である。 のと後まである。海士の人形が傀儡師へ、更に、人形 のと後まである。 のと後まである。 のは、 の関係

だめである。

宇佐八幡の祭りのとき、それがつまり海の精霊

0

仰をする。海士の仕へてゐる神は、百太夫と名付けられる。そして大神の支配をも受けてゐる。しかし信仰の点では小神信の神主は、自分等の団体に関係の深い大神を戴く小神を祀る。日本の信仰では主神を扱ふのは神主で、その下に働く奴隷階級

か不明である。この海士等が八幡神の伴神をば古くから持つて

八幡に附属後の伴神信仰を宣伝し、

同時に八幡神に附属

梁塵秘抄。人形で、傀儡の神である。

語源は何処から来た

曇氏の事を考へて見ねばならぬ。 ・会員の行事を中心として見ると、海士出である。その安の信仰が色合深く出てゐる。その海部の民の宰領は安曇氏で、の信仰が色合深く出てゐる。その海部の民の宰領は安曇氏で、の性神の信仰の面影は巨人伝説にて窺はれるが、神楽を中心としてゐたその海士の合体した系統の信仰が盛んになつた。山人

豪部でも清めの時に占ふ。ト部の方のは同じに見えるので、それは信じない。学者によつては古語拾遺を材料にするので、おは信じない。彼が作つたのは、中臣と対した家、昔のが私は材料にしない。彼が作つたのは、中臣と対した家、昔のが私は材料にしない。彼が作つたのは、中臣と対した家、昔のが私は材料にしない。彼が作つたのは、中臣と対した家、昔のが私は信じない。学者によつては古語拾遺を材料にする人もある私は信じない。学者によつては古語拾遺を材料にする人もある私は信じない。学者によつては古語拾遺を材料にする人もある私は信じない。学者によつては古語拾遺を材料にする人もある私は信じない。学者によつては古語拾遺を材料にする人もある私は信じない。

たのを卜部が蚕食して、斎部はこれが為に亡びた。山神の神人ことほぎに与つた。もと斎部が宮殿を祓ひ、目出度い仕事をしんな職になるものと□□とと云ふ。これが斎部と同じく宮廷の斎部でも清めの時に占ふ。卜部の方のは同じに見えるので、そ斎部でも

ころがこのト部と云ふ職が確立する前に、だん / 〜海土が宮廷ころがこのト部と云ふ職が確立する前に、だん / 〜海土が宮廷ころがこのト部と云ふ歌の中から卜部の宰領が出て来る。海人語部とも云れが神祇官にゐて、卜部に変化して来る。ところがこの中、卜れが神祇官にゐて、卜部に変化して来る。ところがこの中、卜郡職が出て来る。その以前に天語と云ふ家が出て来る。海人語部とも云水が、これが海部文部から分れて来る。内容は両方とも同じやころがこの卜部と云ふ職が確立する前に、だん / 〜海土が宮廷ころがこの卜部と云ふ職が確立する前に、だん / 〜海土が宮廷ころがこの卜部と云ふ職が確立する前に、だん / 〜海土が宮廷ころがこの卜部と云ふ職が確立する前に、だん / 〜海土が宮廷

天語が諸国の叙事詩をば非常に影響して歩いた。宮廷の物語、この天語と云ふものが、宮廷のみでなく民間にも拡がつてゐる。

て了ふ。この斎部広成は古語拾遺を作つたと云はれてゐるが、

かつた神祇官の卜部が参加して来る。する宮廷の祭りには後程変態なものが出来る。

するとト部は斎部を亡し

初め宮廷の祭りにな

うな事をしたのである。

の斎部と海の神の卜部との勢力争ひに依つて斎部は亡びた。

記紀の中に天語があるが、それ以前に沢山出る。天語が宮廷に 大嘗祭について

時、

丁度、御一代一度の大嘗祭が行はれるの日に近く、

且つ又

ある。それを一つの姓とすると、天語連家が出来る。そして形てゐるのである。宮廷の海部丈部は天語でも卜部でもあるのでが何時か宮廷に入つてゐる。海部丈部が、天語の職を持ち入れ自分の神を宣伝しつ、物語りをして行く。そして八幡のもそれ入る前に民間にある海士は常に固定せず移つて行く。その間に

う。たゞこの八幡系統の神楽が宮廷に入つただけでは済まない。一部の変造をした。それ前に神遊びに似た或形をとつてゐたらは、海士の八幡神を祀る作法と同時に、自分の仕へてゐる神をは、海士の八幡神を祀る作法と同時に、自分の仕へてゐる神をの上では変つたと見えるが、本は一つものである。私の考へである。それを一つの姓とすると、天語連家が出来る。そして形ある。それを一つの姓とすると、天語連家が出来る。そして形ある。

つた。八幡系統の神楽と宮廷の神楽との違ふところは、才男は力を得、それが同時に神楽が宮廷に勢力を占めて来る原因とな力を得、それが同時に神楽が宮廷に勢力を占めて来る原因とな海士故に一方天語り同様の仕事をして神遊びを行つた。斎部で海士故に一方天語り同様の仕事をして神遊びを行つた。斎部であいた。八幡系統の神楽と宮廷の神楽との違ふところは、才男はも一面から見ると卜部が勢力を得て斎部を倒したのは、卜部はも一面から見ると卜部が勢力を得て斎部を倒したのは、卜部はも一面から見ると卜部が勢力を得て斎部を倒したのは、才男は

、八幡系統の神楽と宮廷の神楽との違ふところは、才男はつた。八幡系統の神楽と宮廷の神楽との対立がとい。しかし宮廷の才男は人形の身振りをするらしい。この関める。神楽は海士系の八幡神楽が本である。それは同時に宮廷の鎮魂の神遊びを変化増殖したものであつて、それを行ふに至め鎮魂の神遊びを変化増殖したものであつて、それを行ふに至めは、本事は一段である。神楽は海士系の八幡神楽が本である。それは同時に宮廷といるのは単に入つたのではなしに、天語の叙事詩の流行と、鎮いるのは、本事は一切ない。

奈良朝少し前から大嘗祭又は新嘗祭の大体の範囲は定つてゐる。まづ大嘗祭とは何んな祭りかと云ふことから云つて見る。

事にしたい。

にしてゐる点が多いから文学史の時間を割いて特に聞いて頂くもなく、大嘗祭について、私の考へは世間の説と大分見方を異文学史の方も神楽を講義してゐる時とて、全然関係がないこと

時、田舎では田の神祭りが秋の頃に行はれてゐた。ところが、と云ふ秋の田の神の祭りの意味になつて了つてゐる。勿論、当それは近代まで大嘗祭の意味を限定してゐる。即ち支那の嘗祭

宮廷の祭りが田舎の祭りを支配してゐた。宮廷より出て田舎の宮廷のこの祭りに対する考への差異が認められる。日本の昔は廷では特に天つ神に奉ることになつてゐる。そこにもう田舎と考へてゐる。田舎では秋の米の初穂を神に奉るのであるが、宮宮廷の嘗祭は天つ神にその秋に刈入れた初穂の米を差上げると宮廷の嘗祭は天つ神にその秋に刈入れた初穂の米を差上げると

の差がある。その意味は一つである。りにだけは、単に神に奉るとするのと天つ神に奉るとするのと天つ神に奉るとするのと信仰を統一してゐた。奈良朝以前にも。しかるにこの新嘗の祭

強力な権威のある身となる。これは稲穂に魂があると云ふマ村の稲穂が奉られて、飯と酒が造られ、天子がこれを召されて紀・主基の国が定められ、その悠紀・主基の国の悠紀・主基のところが考へて見るとさうでない部分がある。大嘗祭に於て悠

ナーの信仰があるからである。

には、天子がここで御飯を喰べるのだらう。そしてその友人は 安な説は出さない方がよい。た、徒らに神聖を害するに過ぎな らも御飯を召上ると云つてゐるが、危ない説である。こんな不 なほこの死骸は天照大神で、この方に御飯を奉り奨め、 方式だと云はれてゐる。死骸を二つ置く必要があるのだらうか。 してその中、今話すのは一番よいと自分は信じてゐる。 については、昔から種々説があるけれども、解決はいまだつい に分けたのである。この両宮殿には衾が置かれてある。この衾 は今の建て方であつた。天武天皇の時に悠紀殿、主基殿の二つ の様であつたか何うか解らないが、とにかく平安朝百年の頃に ないが、大嘗宮の建て方である。あの宮の建て方は古くからあ 天子の身に入れるのとは違ふ。ところがも一つ、稲には関係が 仰が大嘗祭にあつた。稲がよく出来たから奉るのと、稲の魂を の魂が天子の身の中に入る式がある。すると稲の魂を迎へる信 のである。この方を見ると大嘗祭に一つの意味の違つた神の稲 警蹕を掛けて入つて来る事はない筈である。下のものにかける に、ない処へ警蹕の声を掛けて米が入つて来る。尊い方の所へ るのを正式だと考へるのは変である。又私の尊敬する友人の中 である。衾を何故二つ作るのか、また祖先には寝間で飯を喰べ 宮殿の両方に衾の設けてあるのは、山本氏は死骸の置いてある てはゐない。私も色々に考へて幾色にも答案を持つてゐる。 いからである。こんな説を貫通しなければ学説とはならないの 天子躬 そ

> ある。 理的であるが、米の種をば天より持つて来て、この国に作る。 意味がなく、米の種に意味がある。米の種の理会は宮廷では合 る。悠紀・主基の代表者をかうして出すのであつて、それには 悠紀・主基と定め、そして悠紀・主基の郡・村を定めるのであ して考へ、天上の種を二つに分けて、それを作り分けた地方を の仮説を立て、見たが、どうもいけない。天上の田を地上に移 色々考へて見ても悠紀・主基と云ふ事が解らない。 死骸だとは云つてゐない。しかし寝間で御飯を喰べるのも変で 私も十 五六

掛声を掛けて来る。宮廷には天皇以上のお方はない筈であるの この風で見ると大嘗祭に悠紀・主基殿へ稲を入れる時に警蹕

0

すると天子は食国の政をなして、その報告をするのが新嘗祭で 古い政の理想であつた。――これは或時期になつて来た。 神の命で作るのである。そしてその出来たのを奏上するのが食 照る間が夜の食国であつた。この国で作る稲は、天上の稲で、天 と昼とに分けたのである。そして農神は月であつて、この神の 食国とは召上り物を作る国の意であつて、後の学者の理解 ある。すると、当然、その天子の時の稲を大嘗祭の時に用ゐる 国の政である。この食国の政を完全に行はうとするのが日本の お治めなさる国――は嘘である。夜の食国とは、同じ世界を夜

奉る。しかし昔はその年のを奉る、これは先代の帝の時の稲で

べきを、近代では近代の天子の物斎みの稲は奉らず、翌年のを

ある。すると昔は何故に即位の初めに新米、自分の責任でもな

い米を奉るのであらうか。つまり吾々の国では、天上の田と同

じく田を作り、それを天上に奉つて天神のものにするのである。

そしてその国を食国と称するのである

源に近い。にへのいみである。こゝでにへと云ふ事が問題にな 方では学問にならない。この場合もにふなみはにひなめより語 めと云ふ詞が古いか何うか分らない。よく世間では、宮廷にあ 云はれてゐる。これは新嘗と同じものである。だから、 新嘗とは祭のことではなくして祭に先立つ物斎のことである。 果して然様であつたらうか。又新嘗祭と大嘗祭と何れが先にあ てゐる。これは庭に出て御飯を食べ、庭で縄を綯ふ精進日だと されてゐる。近代も庄内辺ではにはなひ行と云つて物斎みをし て、新しい力で民に臨むのだと思ふ。 を繰り返して変化したもので、毎年天子がこれによつて復活し それが前述の考へ方によつて新嘗祭が行はれる事になつた。 天子が毎年おやりになる事から考へれば、大嘗祭がまづあつて、 のだと思ふ。日本の考へ方では一度あつた事は毎年繰り返す。 る。そしてその新嘗を天子が即位に際して御一代一度盛大に行 行はれ、大嘗祭は天子一代一度と考へられてゐるが、古へから 地方では、 万葉集東歌にはにふなみ、平安朝末のものには、にはなひと記 かうした大嘗祭が行はれる。その大嘗祭、新嘗祭の詞の意味は 祭を経てゞある。すると一代一度が本当である。新嘗祭はこれ して天子は新嘗祭を経て復活する。天子が完全になるのは大嘗 ふのを大嘗祭と云ふと考へてゐるが、私は大嘗祭が先づあつた つたのか。普通には、新嘗と云ふ詞の方が先にあつたとしてゐ は意味が違ふ。天子の新嘗祭の場合は、新嘗祭は天子一代毎年 言葉は必ず正しいと考へ勝ちであるが、さう云ふ考へ 田の神の為に新嘗をする。新嘗祭は天子の新嘗の時 にひな そ

の言葉では、未だ手のつかないものと云ふこと。人において新 と云ふのと同じく、新嘗を行ふ処。新室の新と云ふことは日本 秋祭りの間に、にへの祭りに奉る物を条件として、神の上るも 云ふ言葉は、にひなめより古いと思ふ。しかし、にふなみ以前 に触れずに共に慎しんでゐる。これがにふなみで、にふなみと める。この時にはその家の男は皆外に出て居り、 同じである。とにかく巫女が神を祭つて、夜来た神ににへを進 奉るものを喰べて、上の人の所へ帰ると、この上の人は更に上 よく解るのは、この時に上の人の代理者が来て、居処で家主の これに対して新室へ来るのが常世神である。ところが西の方で りの客が来る。即ち土地の精霊が新室のことほぎにやつて来、 来た神を家に残つた女が饗応する。西国では新嘗の夜は、二通 釈くと、にへを奉るに先立つての物忌みと云ふことで、この事 つた。にへに甦り、復活の形があつたらしい。新室は、 のをにへと云うたのではないか。にへにはも一つ以前の形があ の人、神を祭る。その間に少しの違ひはあつても大体において 実は東歌、常陸風土記等にも出てゐる。男が一切出払つた家に にへの斎みをそのまま田の神祭りに、天つ神祭りに入れて来て ににへとして差上げますと云ふ事を知らせるだけである。 て、これ等いけにへは神にお目に掛けて、何時でも御意のまゝ しない生のものはいけにへと云ふ。米ならばかけぢからであつ にへとは神の上りもの、中で料理したもの、ことである。 る。進んでゐた仮定だけが残るから解らないが、 女は前から男 解る限りでは 新室屋 料理

妻と云ふことは花嫁と云ふこと、は違ふ。花嫁と云ふのも嫁に

になる資格を一つ欠いて、なれないもののこと、それが一転化花と云ふのは、手の触れられないもののこと。新妻とはまだ妻条件が具はれば、目的の階級に行くことの出来る者に云ふ。新成り立ての人と云ふ事ではない。新は候補者であつて、も一つ

ない。にひとにへとは関係があるに違ひない。ところの新人をだ手のつかない肌と云ふ事であつて、にひとはこの意味より出して、夫にまだ会はない女と云ふことになつた。にひ肌とはま

ばところの神への候補者として、祭りを通り越すと神人となる。

種のある資格を具へさせる形がにへである。私は、にへなみ

る神から成年戒を受ける。宮廷では純化して天神に。

ある。この榜証は如何でもあるが、榜証は如何にあつても傍証にへ、にひの式であると思つてゐる。たゞしこれは未だ仮定ではにへを奉る式だが、そのもとは、神が来て戒律を授ける式が、

たるにすぎない。

云ふと、田の神の祭りは秋祭りで、この秋祭りにはいろいろあ田の神を迎へるのと天つ神に奉るのとでは大分違ふ。まづ詞でその時に女のみが家に残つてゐるのである。この時にはつまり昔なら神が来て食物を喰べて行く、このにはなひと同じ新嘗はそれで、神が家を占領する日が新嘗

い。どうも地方のは筋が通るが。新嘗の神をねぎらふ時に、あれる。というも地方のは筋が通るが。新嘗と同じで宮廷の新嘗はおかし霊を祭つてゐる。すると田舎の秋祭りと同じことになる。そし霊を祭つてゐる。にも関らず、宮廷では土地の邪魔をする精ふのは新嘗である。にも関らず、宮廷では土地の邪魔をする精い。龍田の風の神の祝詞を見れば解る。するとこの秋祭りと云い。龍田の風の神の祝詞を見れば解る。するとこの秋祭りと云いる。秋祭りとは秋に物を奉る事で、その秋と云ふのは春夏秋冬る。秋祭りとは秋に物を奉る事で、その秋と云ふのは春夏秋冬

い。まづ北野の斎場に悠紀殿・主基殿を作り、青山を作る。標わく。群行の中の上の方である。酒造児は巫女である。稲実の本体で、大嘗宮のみつかまへると徹底しなに入る。群行の中の上の方である。酒造児は巫女である。稲実の書は稲の精霊をイの本体で、大嘗宮のみつかまへると徹底しない。まづ北野の斎場に悠紀殿・主基殿の神は問題である。稲の魂とも考へられ一体、悠紀殿、主基殿の神は問題である。稲の魂とも考へられ

して天つ神にも見える。ところが日本の信仰では、祭りに当つれを宮中に曳くと云ふのは、神を大嘗宮に曳く事で、神は一見りになつて来る。大分前から標山を引く。これが次第に祭りの飾る。悠紀・主基の斎場から標山を引く。これが次第に祭りの飾らになつて来る。大分前から標の山を曳かなくなつてゐる。こりになつて来る。大分前から標の山と云つてゐる。標の山は神が目頃になると音読してひようの山と云いてゐる。平安朝も百年山と云ふべきを、古事記には青山と書いてある。平安朝も百年山と云ふべきを、古事記には青山と書いてある。平安朝も百年

て了ふのである。かく天上と地上とを一致するのが呪詞の力でて、天子が祭りを行つて居られるところが、このま、天になつ

へである。衾は瓊々杵尊の真床襲衾の儀式を襲ふてゐるのであ ではないかと思ふ。まだものにならぬものの控へてゐるのがに 主基両殿の衾の儀式が大嘗祭のもとで、にへのいみの最初の事 私の考へるところに拠れば、大嘗祭の一番終りに行はれる悠紀 ゐる。従つて何処までが古風かは問題である 正天皇の時の大嘗祭には形を整へた為に本儀が変化を来たして 録は記録であつてそのま、再現せられたのではない。それが大 時の大嘗祭の記憶は薄らいでゐる。 り明治天皇、明治天皇より大正天皇に至るまでの、明治天皇の には新式を加へる故に形は変化するのが常である。孝明天皇よ ゐるのであつて、そして宮廷の威力が栄えて盛んに行はれる時 盛衰に伴つて、同に栄え、盛大に行はれ、時に衰へて緩みして は逆である。そこに矛盾があるのである。一体大嘗祭は宮廷の 警蹕の声を掛る。天子に米を奉るのと、天子の身に入るのとで 天子の身につく為に天子の居られる所に入つてゆく。この時に 変に思へる位である。ともかく稲実君と酒造児は宮廷に入り、 変化して重なつてゐることが分るのである。今云つただけでも 来の祭りは、時代々々の理解を加へてゐる為に変つてゐること、 は中央では用ゐなくなつた。これだけで見ても、日本の神代以 は意味が解らないが、た、曳かねばならぬ事であつて、近頃で から、連れて来ないでもよいのである。だから祭の時の標の山 である。それに稲実君・酒造児は悠紀・主基の国から来てゐる ある。故に導かる、神は常世の神か、山の上の精霊か。 筋に続いてゐるのではなく、後代の理解によつて同じ儀式が 記録はあるに違ひないが記 何 n か

の形だと云ふことがわかる。大嘗祭の式の古いのはここにある。である。すると瓊々杵尊の天より来たのは、大嘗祭の一番初めど、弟媛である。人数は兄媛一人、弟媛数人が出るのである。倭摩の阿太の笠沙の碕で禊ぎをした。そして是に仕へた女が兄」の形だと云ふことがわかる。大嘗祭の式の古いのはここにある。尊の赤ん坊をってある。すると瓊々杵尊の天より来にである。尊の赤ん坊をつ形だと云ふことがわかる。大嘗祭の式の古いのはここにある。の形だと云ふことがわかる。大嘗祭の式の古いのはここにある。の形だと云ふことがわかる。大嘗祭の式の古いのはここにある。の形だと云ふことがわかる。大嘗祭の式の古いのはここにある。の形だと云ふことがわかる。大嘗祭の式の古いのはここにある。

大嘗祭は、この為に繰り返したと私は考へる。

壬生部は天子を水に潜らせる役を務める。この事は豪族の家にになる時の年間として生れかはらねばならないのであつた。 になる時の有様は一度水の中へ潜らねばならないのであつた。 になる時の有様は一度水の中へ潜らねばならないのであつた。 そして神として生れて来なければならなかつた。それには産湯 が真ん中にある。天子や豪族の家の産湯の話は主となるところが真ん中にある。天子や豪族の家の産湯の話は主となるところが真ん中にある。天子や豪族の家の産湯の話は主となるところが真ん中にある。天子や豪族の家の産湯の話は主となるところが真ん中にある。天子が水をお使ひになると、壬生(ニブ・ニフ)部を見ても、天子が水をお使ひになると、壬生(ニブ・ニフ)部を見ても、天子が水をお使ひになると、壬生(ニブ・ニフ)部を見ても、天子が水をお使ひになると、壬生(ニブ・ニフ)部を見ても、天子が水をお使ひになると、壬生(ニブ・ニフ)部を見ても、天子が水をお使ひになると、壬生(ニブ・ニフ)部を見ても、天子が水をお使ひになると、壬生(ニブ・ニフ)部を見ても、天子が水をお使いたる。 したくはない。それは便利ではあるが、い、事ではないと思ふ。) したくはない。それは便利ではあるが、い、事ではないと思ふ。)

もあつた事である。

属の部落が出来、それを丹比氏が宰領するのである。 さんがある。この五種の女の選ばれるのが本当で、反正天皇直 若湯坐―取り上げ姉さん―、飯噛、乳母、湯母の五種のお乳母 鸕鶿草葺不合尊の時の伝へによると大湯坐―取り上げ婆さん―、 れを丹比壬生部と云ふ。この時の壬生の主なものは五つある。

つまり、赤子から産湯を使つて誕生する。この時に湯の中で紐 行はれる。どうしても解けない紐を解くと性慾が開放される。 た形である。今までの赤子から人間になられると性慾の開放が 水に潜つて上られたのが生れ変られて、赤子から人間になられ

瓊々杵の尊の真床襲衾は赤子の状態であつて、魂を入れねばな る の皇后である。天子と嫌はれる女との話があるのはその為であ 湯坐に御手がつく。そして天子は完全な神になる。この女が後 を解く役を奉仕するのが若湯坐で、性慾に開放せられたので若

寿詞は平安朝末期に悪左府賴長が、その勢力をたのんで記録し ゐる。大嘗祭にもこの事は行はれ、中臣の神主が天神寿詞を奏 るが、丹比の色鳴の氏の上が天神寿詞を読み上げた事になつて らぬのである。大嘗祭には、反正天皇や瓊々杵の尊等の話で解 のである。中臣氏は天子の召上り水を司る家で、やがて禊ぎの て置いたもので、中臣氏としての理解が加はつて変つてゐるも さうすると天子が健康になると考へてゐる。中臣氏の天神

> 理解で入れられた。 祭にも行はれるが、米を国家で大切にするやうになつてからの べきものが、中臣氏の理解が入つてゐるのである。これが大嘗 で天つ神の祝詞はもつと禊ぎの事を書いたもので、単純である 飯を焚いて天寿の長からうことと天子を祝福してゐる。

ば大正天皇は天子ではなかつた(信仰上)。いよく、一つ難関 大嘗祭の時に衾に入られる天子は赤子である。それまでは例 衾はも

りと云ふ。殯宮の間のもので、もとは魂の発散しつくした人と もの中へお二方が入られたのだと思ふ。古くはこれをも、 かと云ふと先代の天子の入るところである。私はもとは一つの ら出て来られて、初めて日の御子になられる。も一つの衾は何 高、空つ日高と分けてゐると云はれる方がそこにゐる。これか おかれるのである。一方の衾に天子が入られる。これを天つ日 中に入られる。それが真床襲衾と同じで、天子は赤子の状態に しも、も等と云ふ腰巻ももである。そのもが衾と同じで、この を越すと天子になる。それは衾に籠られる事である。 一種である。ふすまはふすもである。もは広い切れである。

ある。それには、悠紀・主基が分れたので、衾が二つになつた 来られると思つた、だから一つの衾でなければならないのであ のか、衾が二つに分れたので悠紀殿・主基殿に分れたのか何れ 最後の鎮魂式で、衾から出て来られる。昔の人は、 る。衾の中は同じことであるが、出る時に生れ変つて来るので

新しく魂を取入れる人と一緒に入り、この間に鎮魂式が行はれ

先帝が出て

水をも司るやうになつた。

中臣氏のを見ても非常に変つてゐる。

天神の教へにより水を得て、その水をもつて、酒を造り、 召上る水は天上の水と地上の水とを混合せねばならなかつ

かである。これを理解をつけて、

何れかに定めるのは論理の遊

は、このようを引き出く、このよこせとは、このようには、このよいである。 はは鎮魂の為に籠られる。即ち復活の式で、この時期をもにこには鎮魂の為に籠られる。即ち復活の式で、この時期をもにこには鎮魂の為に籠られる。即ち復活の式で、この時期をもにこれがで、このみかげの苦しい生活をなさる。 鎮魂式をやつて魂がつめると云ふ。 一方の衾は死んだ人、一方のは天子になる人、戯に陥ち入る。一方の衾は死んだ人、一方のは天子になる人、

今でも大嘗祭に用ゐる衣に三通りある。天の羽衣、なみぎぬ(波て性慾の解放となり、その対象が后と呼ばれるのである。湯に入れ、天つ神の寿詞を唱へ、この時に紐を解く女が出て来

である。

式が上は宮廷より下は民間まで拡つて行く。これは物斎みの衣い。褌を着けて入つて風呂の中で解いて了ふのである。そのれてゐた。これは何だと云ふと、普通には湯の中で褌をするのは隠し所を見られるといけないからと考へてゐるが、さうではれてゐた。これは何だと云ふと、普通には湯の中で褌をするのない。褌を着けて入つて風呂の中で解いて了ふのである。その人は湯に絹)――湯殿にかぶせるものらしい――、明衣。昔の人は湯に

何時か逆に考へられるやうになつた。
「は駄目であつた。開放するのである。裸祭りである。それがと神人となる。後には、若い衆だから着けると考へてゐる。解くと神人となる。後には、若い衆だから着けると考へてゐる。なして誇りかにわざく、見せびらかしてゐる。本来は着けてゐて、以間の事で見ると、若い衆仲間に入るまでは褌をつけてゐて、民間の事で見ると、若い衆仲間に入るまでは褌をつけてゐて、民間の事で見ると、若い衆仲間に入るまでは褌をつけてゐる。不及問の事で見ると、若い衆仲間に入るまでは、一次と言いる。

祭の順になつて了つた。それは即位式が最も大切にせられた為義のそれと順序が逆になつてゐる。即ち即位式、鎮魂祭、大嘗発する詞がのりとごと、――のりとでゐる。今の大嘗祭は、古発する詞がのりとごと、――のりとである。今の大嘗祭は、古ののりとで、同時に御即位ののりとである。今の大嘗祭は、古ののりとで、同時に御座――ものを云ふ場所――で、そこで表する詞がのりとごと、――のりとである。今の大嘗祭は、古ののりとである。そして湯から出られると地上であつて高い所天子が湯に入つてゐる時に側で天つ神の寿詞を唱へると、この天子が湯に入つてゐる時に側で天つ神の寿詞を唱へると、この

役を務める。これが皇后である。だん~~皇后が廻立殿に入らられる。昔も廻立殿の湯殿と反対側の内侍座の内侍がこの時のは鎮魂式で、これをやると衾の方に魂がつき、廻立殿の湯に入りすぎる。一つだけでよい事を重ねてやつてゐる。主にやる事悠紀・主基両殿の事を考へると、悠紀・主基両殿で同じ事をや

**—** 90

の目的を定めて掛つて、その本義をつきとめねば解らないのでれるやうになる。そして天子は帳殿に入られ、大嘗祭は第一に、にへ、にひの祭である。人を神人とし私は、大嘗祭は第一に、にへ、にひの祭である。人を神人としればすべての式をせねばならなくなつてゐる為に、新嘗祭一つ行ふして皆やらなければならなくなつてゐる為に、新嘗祭一つ行ふのにも皆せねばならぬ。よつて単純であり得なくなつて、本当の目的を定めて掛つて、その本義をつきとめねば解らないのでれるやうになる。そして天子は帳殿に入られ、大嘗宮を拝してれるやうになる。そして天子は帳殿に入られ、大嘗宮を拝してれるやうになる。そして天子は帳殿に入られ、大嘗宮を拝してれるやうになる。そして天子は帳殿に入られ、大嘗宮を拝してれるやうになる。

ある。

らふ祭、それ等が単純化されて天神に報告する祭りと云ふ風につける復活の式で、これから稲の魂の信仰、土地の精霊をねぎ為がにへの祭りだと考へる。すると一番初めなのは天子に魂を

なつたのだ。

思ふ。然様考へねば田舎の新嘗祭は早いのに、宮廷のは年の交ち地方の米を宮廷へ持ち来し、これを天子が召し上られ、更にち地方の米を宮廷へ持ち来し、これを天子が召し上られ、更に誤つた事である。本来は新嘗祭より神嘗祭とすべきである。即誤のた事である。本来は新嘗祭より神嘗祭とすべきである。即

ておいた。

天子の魂のふゆをするふゆの祭り、みたまのふゆ祭りである。かひに来た精霊に食はせる。夜半の鎮魂式は遠来の遠い神で、秋と冬と春の祭りは、新嘗祭の宵祭りが秋の祭りで、新室のほ

代期にやる解釈がつかない。

この三つの祭りは、夕方から翌朝まで続くのである。それが支はない。復活後、高御座からのりとを発する。それが春祭りで、と云ふ。冬の物忌みの事で、木草が芽に籠つてゐるからの謂でと云ふ。冬の物忌みの事で、木草が芽に籠つてゐるからの謂でもり。それずのありるである。

く感じて来たがもとは海部

那より輸入せられた太陰暦によつて暦法が変つてから、秋祭り

やはり平安朝百年頃の読方に従つておほんべと読む方がよいとでは解るが、果して昔から大にへと云つたか否かは問題である。下では解るが、果して昔から大にへと云つたか否かは問題である。本では解るが、果して昔から大にへと云つたか否かは問題である。本は解るが、果して昔から大にへと云つたか否かは問題である。本はり平安神の時分に行ひ、冬、春の祭りを暦法上の冬、春に割り当は早稲の時分に行ひ、冬、春の祭りを暦法上の冬、春に割り当は早稲の時分に行ひ、冬、春の祭りを暦法上の冬、春に割り当は早稲の時分に行ひ、冬、春の祭りを暦法上の冬、春に割り当

(5月11日) 「10日) 「10

(昭和三年十一月八日)

と云ふ話に関連して、才男、人長への話を進める拵へだけをし回の話の了ひでは、宮廷の神楽は石清水八幡系統の神楽である間に大嘗祭の話を入れて、一寸気の拔けた形になつたが、前々

この宰領をしたのが天語連である。あまは神聖。かくして、か部の前身をなし、一方、語りごとを主としたものが天語部で、身は海部文部であり、一部は天語部である。海士出で語りごと、身は海部文部である。その宮中へ入つた手順は略述したとこ、海部系統のものである。その宮中へ入つた手順は略述したとこにの宰領をしたのが天語連である。あまは神聖。かくして、かまの前身をなし、一方、語りごとを主としたものが天語連である。あまは神聖。かくして、かまの字領をしたのが天語連である。あまは神聖。かくして、かまの字領をしたのが天語連である。あまは神聖。かくして、かまの字領をしたのが天語連である。あまは神聖。かくして、かまの字領をしたのが天語連である。あまは神聖。かくして、かまの字領をしたのが天語連である。あまは神聖。かくして、かまの字領をしたのが天語連である。あまは神聖。かくして、かまの字領をしたのが大語が大きにある。ある。あまは神聖。かくして、かまの字領をしたのが天語連である。あまは神聖。かくして、かまの字領をしたのが大語が大語が大語が大語が大語が表して、からいまにはいました。

の神遊びがあつたらしい。それには卜部の祭文の事を云ふ必要の神遊びがあつたらしい。それには卜部の祭文の事を云ふ必要疾転使の方が宮廷に入つて卜部となる。ところがこの卜部の栄に事の隠れた点は何であつたか。斎部の仕事は既に平安朝には任事の隠れた点は何であつたか。斎部の仕事は既に平安朝には任事の隠れた点は何である。いまはり、きよまはりをする部曲になつ解らなくなつてゐる。いまはり、きよまはりをする部曲になつ解らなくなつてゐる。いまはり、きよまはりをする。ところがこの卜部の栄養、今のところでは天語部の方は関係がないから暫くおいて。

がある。祭文は今は人の死んだ時の外には使はない。祭文を嫌

唱へ言は精霊に向つて云ふ。ところが精霊の地位がだん て理解を持たせやうとする。さうすると、これは卜部の祭文に まつて、 た。祝詞とは、もと上より下に下すものであつたのが、平安朝 すると今度は次第に祝詞の方まで祭文と称することが拡つて来 れてゐた。寿詞の意味は、 ものに云ふ言葉であつて、下から上へ奏上するのは寿詞と云は 少なくとも昔の祝詞とは内容が違ふ。昔の祝詞とは上から下の ろが、祭文は祝詞とは内容が違ふ。今の祝詞とは然でもないが、 例へば、大祓のことば等も中臣の祭文と云つたのである。 になり、 である。 る。日本の陰陽道は寺方の支那智識であつたものが、大部分で 祭文とは卜部ののりとで、この詞は寺方出の陰陽道の影響を受 は新古二つある。 る。卜部の祭文のもとは鎮護詞にある。ところがこの鎮護詞に 含む。その出発点は寿詞、 の祝詞等云ふ言葉はない筈である。寿詞から出た祭文は祝詞を の祝詞と云ふ言葉はこの関係は無茶苦茶に使はれてゐた。 い詞と考へられる。故に祭文は凡ての寿詞の内容を持つて来た。 ある。だから寺方の祭り方は始めから陰陽道の影響があつたの ることは難しいものである。しかし、それは然様になる筈であ けたもので、寺方にも儒教にも祭文があつて、その結着をつけ 神と地位を争ふ様になると精霊への言葉を神に聞かせ 平安朝のこの種のものを凡て祭文の名で掩つてゐた。 ト部は陰陽道と関係がある。宮廷の卜部のは祭文の名 古いのは斎部の唱へ言の本筋である。 鎮護詞 目出度い時に奏上する祝福の目出度 ——又鎮詞、 護詞——、 斎部の (高

にあ

斎部

ふ理由が神主にあるのである。

寺の地主神の仮装行列の形を変へて来た。この牛祭りその他の れには奈良朝前より伎楽の影響がある。 来る。つまり低い位置の神が高い菩薩の行列に代つて来る。 列が何の寺でも行はれ、 物、人達を祝ひ、寺を荒すものを呪うて行く。かうした仮装行 神が年末に寺へ練り込んで来て、祝福し、寺の財産を祝ひ、 部の神である。日本でもその考へで神に名を与へてゐる。 これはもとの寺の土地の神である。天竺における仏教以前の天 れは時代によつて変化して来て、ぐろてすくな感じを出して来 ことがある。例へば、京の太秦の牛祭りの仮装行列などー まづ卜部の事を見るには、寺方のことほぎを話す方が瞭らかに 別が、殆ど混乱して了つて、立たない。まづ神主がはつきり解 る。それで大体に於て平安朝の後には祝詞と祭文と宣命との区 彩が多い。故に卜部の祭と古い寺の祭文とは殆ど同じものであ 陽道を一種の神学として組織せられてゐる。それだけに寺の た。一方、卜部のやつてゐる一種の神道は陰陽道によつて、 は羅刹神とか、地主神とか、いろいろに云つてゐる。ともかく た――であつて、この祭りの中心は摩陀羅神と云ふ神で、 なると思ふから、それから話すと、寺へことほぎの行列の来る あ厳格な言葉で何の階級で使ふと定つたものではない。 ふ言葉は、宣命であり、陰陽道系統のは祭文である。祝詞はま つてゐるのは、ねぎ筋――今の神社の祢宜ではない――、 が一歩進むと卜部の祭文となる。これは祝詞の内容を持ち続け なる。延喜式の斎部の祝詞と云ふのは、 純化して菩薩練道と云ふものになつて 伎楽の芸を取入れて、 斎部の鎮護詞で、 この それ 寺で で使

とこ

のは解らない。しかしながらこの想像はつかない事はない。 じである。宮廷へ練り込むだけは解るが、貴族の家へ練り込む るところにある。正月上元の踏歌の節会の場合に同じ行列が出 地主神練り込みの中心は、地主神に仮装した人が、祭文を述べ つぺらぼうの良をした化物) て(宮廷と大きな貴族を祝福する化物の行列で、公卿の姿、 来る。 性質は、地主神の行列と同 0)

定つてゐて、家々を練つて歩くもの、用意をしてゐる。たゞこ 歌の化物行列の練つて来るのに対して、水駅・飯駅・蒭駅等が の行列が宮廷へ行く前に貴族を廻つたのか、後に廻つたのかは 踏

寺の檀那の家を歩く風が思はれる。 寄つて行く様が知れる。寺中又は塔頭を練り歩く風が想像出来、 ある。それで、これによつて見ると寺の仮装行列が彼方此方に の卜部で、その中へ公卿も混つてゐた。面白がつて混つたので

行く道順に従つて物を貰つて行く。この事に与る中心は、 不明である。これは平安朝にあつた踏歌の方式らしい。

行列が 宮廷

鎌倉、 と称する奴隷連中の祝福する、 れだけである。 春田打、 つて、一見つまらない事の様で民間の芸術者には大切なことで それが無暗に多くなつた。これは保護者を多く持つたからであ れない。日本の今までの信仰では定つた家が一軒でよかつた、 つの保護者の家でなく、 この形が伸びて来て田舎から□□をする連中が定まる。 室町の武家時代、 田植ゑ遊び等をやる。それの原因のよく解るのは、こ 踏歌の節会についてゐる土地の地主の神の末だ 呪師、 沢山の家々へ祝言を述べに行く訳が知 田楽、 その仮装行列が寄り道をする。 猿楽、 曲舞の人々が、

> ト部の形を据ゑて置いて古い斎部の形を考へて見やう。この斎 る。社寺に附いたものが、民間の祭文を司つたのであつた。 はり叙事詩的で、浄瑠璃の一脈は山伏祭文より出てゐる。 唱門師の仲間に伝つた。祭文切り唱へるものが山伏祭文で、 のするまじなひの起元を説くのであつて、その祭文が更に低い 内容は叙事詩的である。即ち精霊の筋を明すところ、 喜式に載つてゐるものは感動させぬ。云ひ現し方も新しいが、 文は叙事詩的のものである。この形が祭文の本式のもので、 も殆んど同じで、祭文も殆んど同様の考へ方である。 拡つて行く、かく卜部と寺の奴隷とは同種のもので、なすこと 来て、先づ江戸城を誉めに来、譜代大名の家を祝福して、 その事が無暗に多くなる。万才等も然様である。三河から出て ない。この卜部には宮廷にゐる者の外に、民間にゐるものがあ しても卜部の祭文は、寺の奴隷の読んだ祭文と対照せねば解ら 又は自分 ト部の祭 どう

た。一種の演芸風のものであると思はれる。で、中臣と斎部と 様に見えるが、あの中臣の大祓の言葉を見ると、天つ祝詞と云 散を防ぐのが斎部の魂いはひで、 ふ事である。外部より来るのを身に入れるのが鎮魂である。 い様に抑へに来る。この事は鎮魂と云つてゐるが、 いはひ込めに来る。 臣は神の代理者であり、 の対照は、天の岩戸の時からしてちやんと分れてゐる。 はれてゐる部分が抜いてあつて、これは斎部の仕事に掛つてゐ 部のすることは、斎部の祝詞 又は危く離れようとしてゐる魂を外へ出な 斎部は精霊で、祝福又はその人の魂を -斎部の鎮護詞を唱へたものゝ 初めから斎部と中臣とは仕事 いはふと云 即ち中

が違ふのである。

に神木の中央の芯の枝を折つて全体の代表とすることがある。 で神事を行ふ。精霊がこの木陰に隠れて神の言葉を聞く形式的 がた木の陰に隠れた精霊の形で、その精霊が、下の精霊へ神の ところが斎部は、その玉串を持つ役である。この形の民俗化し ところが斎部は、その玉串を持つ役である。この形の民俗化し ところが斎部は、その玉串を持つ役である。この形の民俗化し ところが斎部は、その玉串を持つ役である。この形の民俗化し ところが斎部は、その玉串を持つ役である。この形の民俗化し ところが斎部は、その玉串を持つ役である。この形の民俗化し ところが斎部は、その玉串を持つ役である。この形の民俗化し

てたものに降る。必ずしも木に下るのみでない。これは且つててからのに降る。必ずしも木に降りて来ると云つてゐたが、変であつた。天つ神が地上の木に降りて来ると云つてゐたが、変であつた。天つ神が地上の木に降りて来ると云つてゐたが、変であつた。天つ神が地上の木に降りて来ると云つてゐたが、変であつた。天つ神が地上の木に降りて来ると云つてゐたが、天神が木の下に坐すか、又は木のきりと問題にされてゐたが、天神が木の下に坐すか、又は木の

土地の精霊の代表者たるしるしに木の陰にゐた。木を持つと神全く別に考へねばならない。木陰の神は天降りした神ではなく、大嘗祭に引かれた標の山の原理である。ところが木陰の神は、

になり、

、木を離すと人となる。

る。採物を持たなければ、神遊びの効果は表れなかつた。手にだから手草を持つと離すとで資格上に非常な差があることになそれが神事が済むと、その木を置いて行く。手草を置いて行く。接に祭りになる小忌人と云ふものがある。これは凡て神である。は神の物斎みのしるし――例へば大嘗祭で云へば、天子初め直は神の物斎みのしるし―――例へば大嘗祭で云へば、天子初め直そこで、神道で云つた採物――鎮魂の道具であつた――、手草

ゆの木も物忌みの木で、次第に一つの木の名前となつて行つた。る。物忌みの木であるが、現在柳と云つてゐる木一種ではない。三つの日に散らばつて柳の下の祝言を行つた。これをゆの木の三つ日に散らばつて柳の下の祝言を行つた。これをゆの木の正月十五日、節分の夜は日本人の信仰上同価値であつた。この

持つものと、大きな木とは同じものである。昔より、大晦日、

表で、手草を持つものと、大きな木の陰に隠れるものと二通りる。全く木の下の精霊の形で、木の下に居るものは、精霊の代か」等と木を脅かして歩くと「なります~~」と答へる形とながある。これが拡張せられると、百姓の家で「なるか、ならぬとは」、「さらばそのことめでたく候」と答へる一種の神事芝居を町時代より近世まで行はれた柳の下等で、「柳の下のおんこ室町時代より近世まで行はれた柳の下等で、「柳の下のおんこ

呼ばれるものに定つて行つた様なものである。例へば、榊の如きも非常に種類の多かつたのが、

次第に今榊と

ある。 ろく」は巨大、偉大等云ふ事らしいと云つてゐるが、どうも然 と云ふ。大火を焚けと云ふ事である。橋本進吉氏は、「とほじ を進めると、宮廷の神楽の時は、「たてあかし、とほじろくせよ」 採物ではなく、 もとは一つの考へ方だから、天の鈿女命の手草は鎮魂の 一種の精霊が祝福に来た形をしてゐた。更に話

る。支那ののとは違ふ と同じものである。御薪を何故奉るかは、今の私には不明であ 霊の持つて来る手草で、一種の貢ぎ物と見た。群臣が奉る御薪 焚く行事が分けるが大嘗祭の火焚き屋の火と同じ。これは、 様らしい。それから篝火を焚いて阿知女作法がはじまる。火を

精

を務めたに違ひない。

くが、これを焚く風は神楽の「たてあかし」の方に遺つてゐる。 のは自分等の手草を奉るのであつて、今では焚かずに積んで置 宮廷の人は神事の資格がある故に神で、この人々が御薪を奉る

木を焚く式である。 「たてあかし」は、只明るくするのではなく精霊の持つて来た

長が、斎部の仕事は才男が行ふ。人長とはつまり神で、才男は が引き出せないが、八幡系統の神楽で見ると、中臣の仕事は人 る。形が変ると、宮廷の鎮魂祭は複雑のものとなつて単純な形 中臣は天子の代りに神となり、斎部は鎮護詞を奉り、演芸をす 解り易く対照して見れば、中臣と斎部は神と精霊の位置に居る。

人長の役が武官に移つた。すると才男も武官が仕へることにな 精霊である。神と精霊との対照がここにも見られる。ところが、

> ふ時期は才男は冬、 中は卜部で、この卜部の行ふ事は同時に、才男のやること。 物の本体――その人々は自らことほぎと云ふ――ことほぎの連 方面までそれが入つてゐる。反対に考へると、踏歌の節会の化 る。これはもう卜部系統の芸能の特長である。身振り、 み上げるに耐へない。直に検束される程のひどい事を云つてゐ ても下が、つた事を云つてゐる。牛祭りの祭文等、 踏歌のは初春であるが、同じものが同じ役 翻訳して読 舞ひの

大伴とは門のことである。奈良朝以前からおほともは大伴で、 音楽芸能にたづさはる事は久しい。例へば、大伴氏は門番で、 武官が神事に与つた事を考へて見ると、日本の宮廷では武官が 団体の部員が多いから大と云ふと考へてゐる。これは家持の歌 ――もの、ふの伴緒ひろき大伴に国栄えむと月は照るらし―

とある如く、宮廷の正門に盾を立て、仮想敵の方へ向けたので 更に物部氏でも、「もの、べのおほまへつぎみたて立つらしも」 伴と呼ばれたものは広い。宮廷の門に月の照してゐることを考 を総括する家だから云ふので、門の番人たる武官で、 で、おほとのぢ、おほとのべの神は門のこと。大伴とは大伴部 を見ても解る如く、家持の心中に潜んでゐる大伴とは門のこと への中へ入れなければ、万葉集の家持のこの歌は解らない。 従つて大

が唱へごとと遊びとを持つてゐる。宮廷の武官は、それからず

あつて、これが大嘗祭の厳粛な仕事であつた。これ等の武官等

立は歴史的に意味がある。 る。中臣即ち人長、宮廷の武官の神楽、斎部、卜部の才男の対つた。神の代りにする。それに対して服するものはいろいろす

からをぎは、韓神を呼ぶ時の舞ひの持ちもの、手草で、人長が は語源は違ふが、連想は等しい。神聖なものを呼ぶらしい。 らをぎは枯葉の荻だと解る。荻、菅は一つの神聖な草で、荻と らないが、実際荻の葉を振る。それを根拠として考へると、 見るとよく解る。この歌は、替へ歌が力をたくましくしたので ころは支那の帰化人秦氏の居つたところで、その辺の地主神が る。 韓神を呼ぶ時に手に取つてゐるのがからをぎ。それが合理化さ の連想は神聖であるが、初めから魂を招ぐからと私は考へない 元の歌はない。「からをぎやせん~~」と云つてゐる詞がわか 韓神である。神楽に出て来るそのま、ではないが、韓神の歌を の神で、園韓神と対立してゐる神である。京都の土地のいゝと 次に手草の事を述べる。此処で云ひたいのはからをぎの事であ れて、荻の葉を採つて舞ふことになつた。それをからをぎと云 神楽の中に韓神と云ふ歌がある。この韓神とは京都の土地 荻 か

こ、の神楽は今から見ると、どれか不明であるが、そこで奏すてゐる。その他にも一つ大嘗祭の悠紀・主基両殿で行はれる。の午の日の午後行はれる――、の二つが内侍所の神楽に対立し韓楽の重立つたものは、内侍所の神楽の他に二つある。即ち園神楽の重立つたものは、内侍所の神楽の他に二つある。即ち園

見当がつく。

がある。即ち似たものが五つある訳である。 楽は前述四つのものであるが、も一つ入れゝば鎮魂祭の神遊び風俗で新作が多い。神楽歌の方は昔からの古いものである。神る主なものは二つある。即ち稲春歌と神楽歌で、稲春歌は所謂

私の考へでは、神楽は石清水の系統のものであるらしい。即ちれの考へでは、神楽は石清水の系統の神楽が入つてゐる。園韓神支那の帰化人の用ゐた一種の鎮魂の歌舞が入つてゐる。園韓神支那の帰化人の用ゐた一種の鎮魂の歌舞が入つてゐる。園韓神支那の帰化人の用ゐた一種の鎮魂の歌舞が入つてゐる。園韓神支那の帰である。——この二書によつて祭の要素を別として、が、その神楽を見ると、——北山抄、江家次第、北山抄の方が古いだけ形が正確である。——この二書によつて祭の要素を別として、が、その神楽をいふのは採物の舞であるらしい。即ちある。この神楽といふのは採物の舞であるらしい。神遊びのあある。この神楽といふのは採物の舞であるらしい。神遊びのあある。この神楽といふのは採物の舞であるらしい。神遊びのあある。この神楽といふのは採物の舞であるらしい。神遊びのあある。この神楽といふのは採物の舞であるらしい。神遊びのあるってない。

……神部等持神宝舞廻 ——北山抄

……次神部四人持神宝舞退 ——江次第

ものと云へる。すると神遊びの中に韓荻の歌の入つてゐるのは等の持つ神を祭るものが神宝を持つて舞ふ。これは神楽と同じ園韓神祭の神部の舞は、理屈から云へば帰化人の子孫で、自分と神宝の説明をしてゐる。神宝は全く採物の事である。と云ふ風に書いてあり、更に江次第では榊、ひさご、弓、剣等と云ふ風に書いてあり、更に江次第では榊、ひさご、弓、剣等

(昭和三年十一月十五日午后

要素が入つてゐると云へる。すると神遊びと神楽との区別は、――、そこへ山背の国に居つた支那の帰化人の一種の鎮魂舞のまづ神楽は神遊びの変態である系統の神遊び――それは海士系

ても、 するまじつくの採物故に、家々の鎮魂法式によつて採物も違ふ。 採物は家々、国々の呪ひのもので、その家、その国を仕合せに に行はれた神楽の採物を取入れたので、鎮魂歌は採物をとる。 は考へると神楽で採物を持つから、神遊びでもそれに似せて行 ばならない。それと同様なものが鎮魂祭の神遊びにある。それ は神遊びのもどき、復演、くだけとなる。だから神遊びにおい つた動作で見せる復演式の所作としてついて来た。すると神楽 それは一緒に混同する事なく復演式に、宮廷の神楽をも一度違 鎮魂式の神遊びの他に、他家の鎮魂式の神遊びがついて来た。 どうして神遊びと神楽と別がついて来たかを考へると、宮廷の は別であることがわかる。その神楽とは何か、それは分るが、 気神琴師弾和琴響鰲。次神楽畢次倭舞」とある。神遊びと神楽と つのまじなひと考へてゐる。更に、「神祇雅楽神遊次御巫衝字 遊儀也」。すると神遊びを平安朝の中頃から末へかけては、 に神遊びと神楽との別をつけてゐる。江次第には「神衝宇気神 神楽畢倭舞」と書いてある。これによると、北山抄では明らか なひだけである。そのあとで、「所司羞饌如常事畢中宮同行、 を見ると、「神遊聯緊緊緊急」、これを神遊びと考へてゐる。まじ は別にしてゐる。神遊びの後に神楽をした証拠がある。北山抄 べて神楽と云はれると見てよい。記録を見ても、神遊と神楽と 神遊びは宮廷元来の鎮魂式、その後に入つて来た鎮魂法が、 宮廷のは古くは、 ふことになつた。宮廷では神遊びの方がもとであつたが、盛ん 神楽においても共通な採物について、も一度考へて見ね 石上の十種の神宝――物部のもの、 宮廷に入 す

り主となる。――、その他に鈿女命の伝統を継ぐ猿女の字気をしてすると、その中にまたもどきの部分が出来る。それが所謂前弦や神楽とが初めは復演式でついてゐたのが、今度は神楽が独ちまじつくの道具から見ても見当がつく。ところが、その神遊びと神楽とが初めは復演式でついてゐたのが、今度は神楽が独立すると、その中にまたもどきの部分が出来る。それが所謂前立すると、その中にまたもどきの部分が出来る。それが所謂前立すると、その前張が盛んになると、その影響によつて神楽が独めまじつくの道具から見ても見当がつく。ところが、その神遊ちまじつくの道具から見ても見当がつく。ところが、その神遊がと神楽とが初めは復演式でついてゐたのが、今度は神楽が独立すると、その前張が盛んになると、その影響によつて神楽が張である。時流に投じた結果である。前張には諸説があるが最もよきは、

日本では古いものは、古いものが逆に新しいものから影響を受ばりより出たさいばらは採物歌とさいばらとの二つに分れる。でいばりである。それが独立して前張となる。今の催馬楽と、神楽と比較すると催馬楽の方を神楽が似せてゐる。催馬楽に唐楽の符の入るやうに、本末の掛け合ひが出て来る。二首又は一葉の介の入るやうに、本末の掛け合ひが出て来る。ごはといふ歌の一群がさいばらの語源であるとする説である。さいといふ歌の一群がさいばらの語源であるとする説である。さいといふ歌の一群がさいばらの語源であるとする説である。さい

けてゐる。で、こゝで神楽の歌の中にはもとくく支那風な、帰

さいばりに衣はそめん雨ふれどうつろひ難しふかく染めて

才男の狂言所作がある事になる。 故に人長の舞を主とは見ない。 楽と対になつてゐた。それから催馬楽の分れる暗示を含んでゐ ら管弦の御遊ありと記されてゐる。清暑堂の神楽は歌が主であ 次第には、採物歌、幣、杓、 楽の調子を合せたものといへる。この清暑堂の神楽の歌は、 北山抄の記事を見ると、催馬楽の意義が解る。神楽の一種で唐 催馬楽は、神歌の調子の変つたもの、歌の唐楽風のものを歌ふ。 に調子を変へたもの、即ち律呂の調子に合せたものを奏する。 有名ではあるが簡単である。これを見ると、神歌の中の支那風 調奏律呂 御座殿上王卿依召着坐即給酒肴並賜管弦器先弾和琴唱神歌次変 残りである。すると、神楽の中の八幡、海士、漢人種の三要素 神祭の系統の神遊び、支那の帰化人の末々のもの、神遊びの名 決して仏教からではなく陰陽道から入つたもの。それ等も園韓 そのま、であると昔から定論になつてゐる。この影響の入り方 ることが分る。採物の歌のあと催馬楽の歌を歌ふ。 が考へられる。清暑堂の神楽は舞は主になつてゐない。「宸儀 から入つてゐる。支那のと寺方のと陰陽道盛んに行はれてゐた。 音楽で器楽と声楽となる。この神楽には殊に才男が働く、 仏教から直に入つたのではなくして仏教臭味の多い陰陽道 (催馬楽) 歌] ---韓神、 -北山抄。とある通り、この神楽は 歌が主で、管弦が入り、間々に 故に催馬楽の成立を見るのに 前張、朝倉、其駒、 採物と催馬 それか 江

> ところが、この神楽の歌と琴歌とは一部通じてゐる。 所の違ひがある。宮廷と結びついた新古が問題になつてゐる。 表してゐる。故に神遊びと神楽には手順に相異がある。 と、神遊びの鎮魂歌とである。それを宮廷では神楽とい 古い。もとは区別がなかつた。ひつくるめると風俗に入る。 ふものは何か。稲舂歌は新作されるが、それに対する神楽歌は も一歩、悠紀・主基の国の稲春歌に続いて行はれる神楽歌とい ると見ねばならぬ。清暑堂の神楽は大嘗祭に行はれる。 を考へ合せて、これにはどうしても支那風の歌ひ方が入つてゐ を主とした為に神楽とも一つの部分たる催馬楽と分れて、 は清暑堂の神楽を考へねばならぬ。清暑堂の神楽が器楽・声 の風俗の中に稲春歌と神楽歌がある。即ち稲を舂く時に歌ふ歌 の調子がいよく~入つて催馬楽となる。そのも一つ前は園韓神 その出 、ふ詞で 唐楽 7

利々」等は経の影響が著しく見えてゐる。「明星」は「晨朝偈」を通して入つてゐると云へる。神楽で朝歌ふ「明星」、「吉々化人の歌ひ方で歌はれ、まじなはれた部分が支那人の子孫の手

れが次第に進んで来て、平安朝中期には既に神楽は違つた別のは和琴が先に出る。その時に歌ふ。すると、神楽の中に純粋のは和琴が先に出る。その時に歌ふ。すると、神楽の中に純粋のは和琴が先に出る。その時に歌ふ。すると、神楽の中に純粋の所謂神楽があり、他氏の鎮魂に用ゐられることばは、歌と大歌所謂神楽があり、他氏の鎮魂に用ゐられることばは、歌と大歌所謂神楽があり、他氏の鎮魂に用ゐられることばは、歌と大歌が調場合には歌を、他の場合には舞を主とする事がある。神楽で成場合には歌を、他の場合には舞を主とする事がある。それが成場合には歌を、他の場合には舞を主とする事がある。それが成場合には歌を、他の場合には舞を主とする事がある。それが成場合には歌を、他の場合には舞を主とする事がある。それが次第に進んで来て、平安朝中期には既に神楽は違つた別のれが次第に進んで来て、平安朝中期には既に神楽は違つた別のれが次第に進んで来て、平安朝中期には既に神楽は違つた別のれが次第に進んで来て、平安朝中期には既に神楽は違つた別のは和琴が発している。

意味に用ゐられる。それは陰陽師が、

陰陽道で日本の在来の禊

平安朝にはみ禊ぎと祓へとが混乱してゐる。このみ禊ぎの方式 る。夏越しは和しであらう。夏越祓に固つて来てゐる。私はむ 陽師が夏・冬の祓ひの時に利用して、御禊ぎと陰陽道とを附け 禊ぎと日本の陰陽道とは近い関係にある。少なくとも、 ぎを取入れた。法師陰陽師が禊ぎの方式を取り入れたのである。 た。後には次第に夏の六月祓、普通云ふ夏越し祓といはれてゐ 然様考へない。 禊ぎを支那風に説明すれば説明出来ない事はないが、私は暫く、 しろ祓への方が支那種が多いと思ふ。陰陽道の影響多しと考へ み禊ぎは暫くそつとしておく。夏越し祓はみ禊ぎである。 しかし然様な説を否定するだけの根拠はない。 法師陰

るから、も少し前からの考へと見てよい。平安朝百年頃にはも 越しの祓へは出来てゐる。京の御霊の神を送る式で、その後に う行はれてゐた事実である。平安朝の初め桓武天皇の頃から夏 祇園祭が起つて祓へが行はれる。これは祓へを主とする。 の和みと夏越の祓とをかけてゐる。朱雀、村上天皇の時代であ しくてい、、それは水上の美しい心が自分の心に宿るから。 の歌がある。その意味は夏越の神楽を受けると、心がすがくく 水上の心流れて行く水にいとゞなごしの神楽をぞする 心

の時に行ふ楽を神楽と称する。平安朝中期、壬生忠岑の子の、

夏の祓へ、夏越し祓へ、神楽といふものは、平安朝の中頃には

明らかに行はれ、事実に於ても平安の都に移つた時に行はれか

けて、次第に盛んになつてゐる。それを夏越し神楽、

又は夏神

の神楽の主なものは、

ば神楽といふ。その中にはいろんな要素が含まれてゐる。

言と結ぶ。

殊に出雲神楽はその点で非常に発達してゐる。室町時代より後

神楽のもどきの才男の能芸が神楽に発達してゐる。 禊ぎ風で湯立をする。一

部で、

神楽と狂

夏行ふから夏神楽といふ。この冬の神楽を夏に移した事は日本 楽といふ。冬神楽と対立してゐる。神楽は冬のものであるのに

> ものだが、意義を変じて少なくとも表面からは鎮魂と見られな と後半とは同じと考へてゐた。年の初めに行はれるものは前半 たからで、御衣の箱を振動するのがそれである。天子の御衣の 魂を棄てゝ、新しい魂を入れる式が神遊び、神楽に通じてあつ じて魂の遊離を防ぐことになつた。それが結びつくのは、 れの移つたものを水に流す。神楽は外の魂を身につけるのが変 安朝のみ禊ぎは汚れを水に棄てる考へで、自分の身をなぜて汚 の終りに行つても同じである。十二月の神楽は鎮魂式より出た 人の暦の考へ方による。日本人は、古へは一年は同形の年が二 い夏のみ禊ぎに渉つて来た。神楽とみ禊ぎとの差はどこか。平 つあると考へてゐた。六月晦日を間に前年、後年に分け、前半

神をすゞしめるのを神楽とまだ云はないが、その後は東遊び、 が、神を対象として、神を喜ばすのを神楽といふ。 味が変化して鎮魂から離れて来る。今までは魂を対象としたの 時の囃しの音楽を夏神楽と云ふと見られる。この後、神楽の意 同じことになる。その点から御禊ぎ、祓へを神楽と考へ、その けて捨て、了ふ。それをかたしろを主として考へるとみ禊ぎと かたしろが関連してゐる。天子、貴族等が自身の衣に旧魂をつ 平安朝には

まじなひが主で、旧い衣は神部にやつて了ふ。鎮魂式の神楽に

に解決つかないことが多い。僅にこの暗黒を照すのはふおくろのとなるのは、室町時代以後、雑多な芸が含まれてゐて、未だの神楽は殊に分らなくなつてゐる。演劇史では神楽が重大なもの神楽は殊に分らなくなつてゐる。

あの学問である

るのが才男で、それを人名風にして才三とした。獅子使ひの役楽の才男から万才の才三が出る。獅子を舞ふとそのもどきをすその点で神楽の意味がある。獅子と才男と結びついてゐる。神楽様といへば獅子舞の面で、これは魔除けの一の変化である。神楽の才明歌に一例挙げると、日本の東半分は獅子の舞の出るものその刺戟に一例挙げると、日本の東半分は獅子の舞の出るもの

である

はなかく、ないもので、神事舞に様子が入つて神事舞の歴史(万の関係も知れる。一度現れた歴史上の事はその因縁が断ゆる事活が行はれるのである。これは後の歌舞伎を取入れたものである。その前は獅子が神楽の本体で才三が出て茶化し役をして、高劇の出発点のあつたものが育つて来た。獅子を神楽といふのあったものがある。その前は獅子が神楽の本体で才三が出て茶化し役をして、る。その前は獅子が神楽の本体で才三が出て茶化し役をして、る。その前は獅子が神楽の本体で才三が出て茶化し役をして、る。その前は獅子が神楽の本体でオ三が出て茶化し役をして、高が行はれるのである。これは後の歌舞伎を取入れたものである。その前は獅子が神楽の本体でオ三に女は獅子を神楽といふの関係も知れる。一度現れた歴史上の事はその因縁が断ゆる事を見ても魔除け、御禊祓との関係が分る。そして才三と才男との関係も知れる。一度現れた歴史上の事はその因縁が断ゆる事が入つて神事舞の歴史(万の)

才は千秋万才、

唱門師出)

の相手を務める名前となる。それを

な変化を生じてゐる。神楽の研究は意味がある。とにかく神楽は変なもので、室町の頃より無暗に枝が出て複雑ると神楽の才男と万才の才三との歩み寄りが分つて来る。ると神楽の才男と万才の才三との歩み寄りが分つて来る。 オ三といふのは私は三河尾張の万才が、徳川氏が江戸に移つて才三といふのは私は三河尾張の万才が、徳川氏が江戸に移つて

(昭和三年十二月二十日)